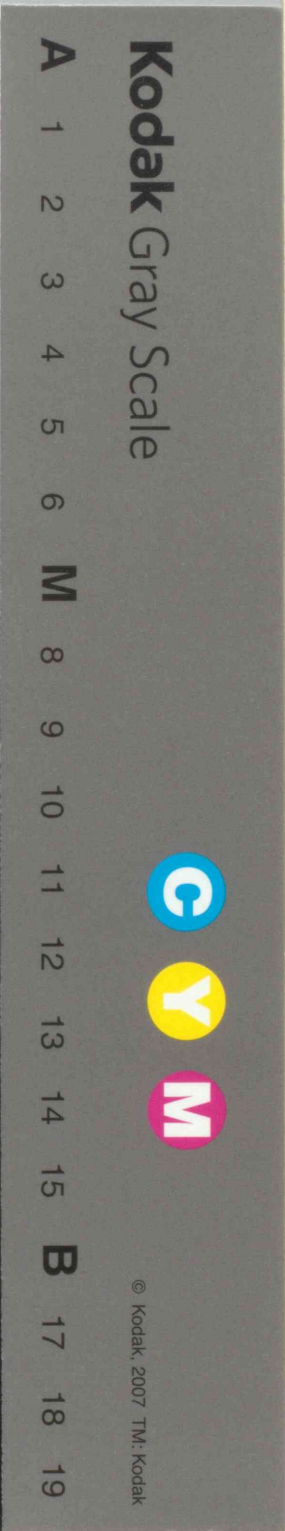
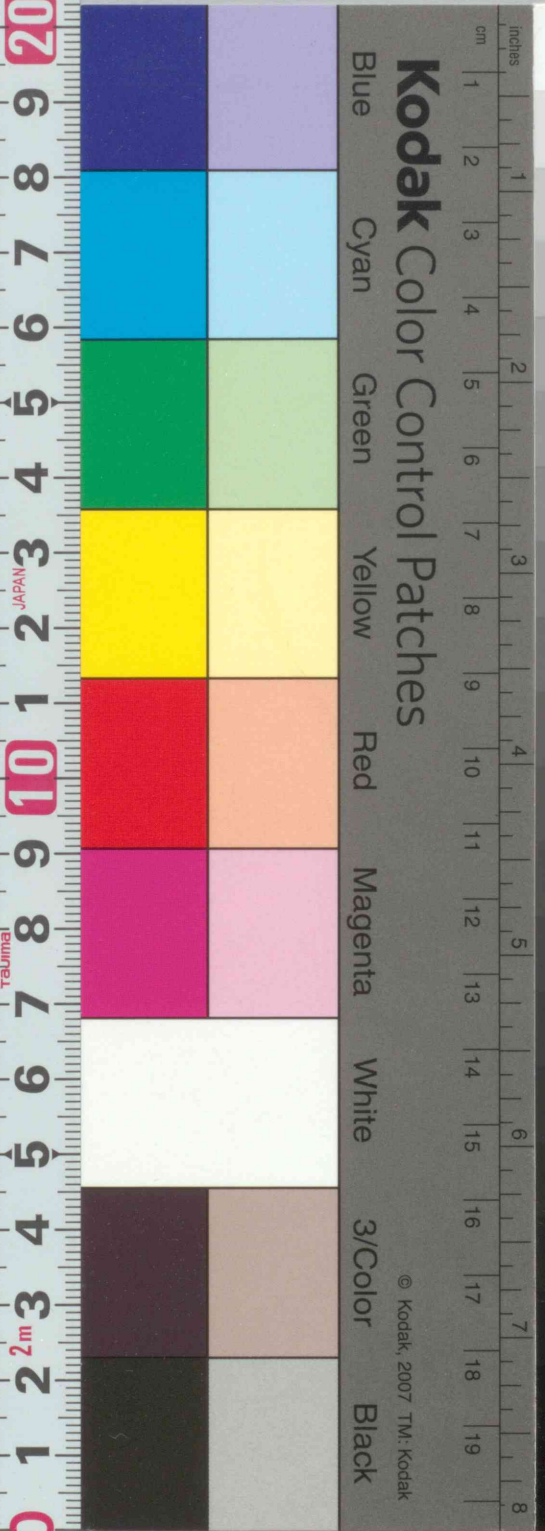


3759
A14
資料室

新制女子國語讀本 卷四

新教授要目準據



42439

教科書文庫

4
810
42-1938
20000
39765

s.13
1938



375.9
An4

資料室

昭和三十一年一月二十六日
文部省檢定
高等女子學校國語科用

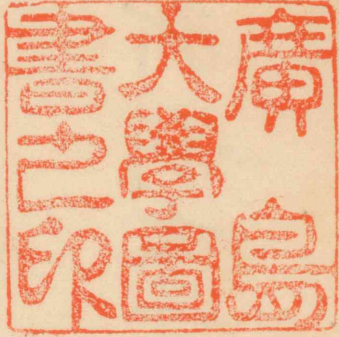
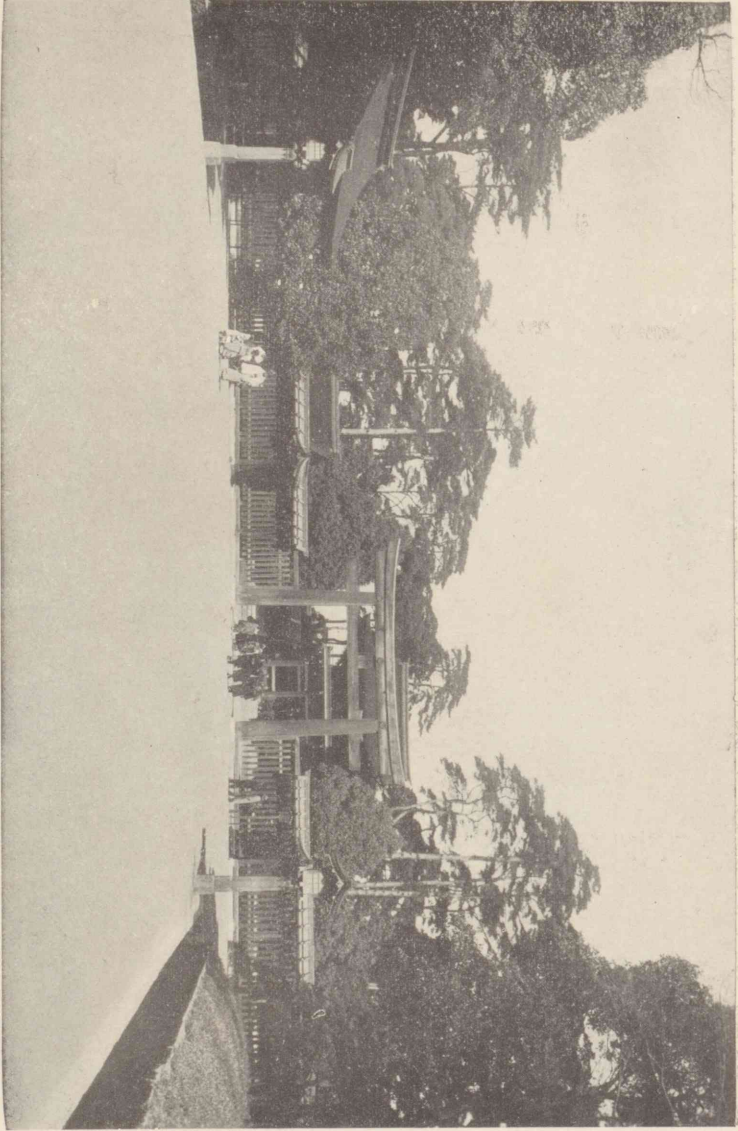
臺北帝國大學教授
學習院教授
安藤正次
東條操
共編

新制女子國語讀本 卷四

新教授要目準據

東京 三省堂
大阪

（照參觀一第） 宮 神 治 明



卷四 目次

一 明治神宮

溝口白羊 一

二 明治天皇の御製

北原白秋 六

三 菊と婦人

棚橋絢子 七

四 白菊

諸家 三

五 秋空(詩)

中西悟堂 三

六 柿

五十嵐力 三

- 七 相模灘の落日
- 八 霧の倫敦
- 九 ドイツの女
- 一〇 落穂拾ひ
- 一一 玄妙の音
- 一二 板倉勝重
- 一三 加賀の千代女
- 一四 明るい顔(詩)

- 徳富蘆花 一〇
- 夏目漱石 一三
- 小宮豊隆 一五
- 山田邦祐 一七
- 鈴木鼓村 一八
- 新井白石 一九
- 佐々醒雪 二〇
- 河井醉茗 二〇

- 一五 スキー禮讚
- 一六 春夏秋冬(短歌)
- 一七 鐘の音
- 一八 文章の道
- 一九 本居宣長の母
- 二〇 我が國の家庭
- 二一 この正月
- 二二 祖先の祭祀

- 黒田米子 二〇
- 諸家 二〇
- 奥田正造 二四
- 島崎藤村 二九
- 佐佐木信綱 二七
- 芳賀矢一 二五
- 落合直文 二四
- 松平定信 二五

三 やさしい贈物

四 夜 ○又五王

今井邦子 一頁

岡本綺堂 一巻

— 目次 終 —



溝口白羊
名は駒造。文學者。
詩人。大阪の人。
明治十四年生。

代々木
東京市澁谷區にあ
る地名。

女子新國語讀本 卷四

一 明治神宮

溝口白羊

快美な色彩の反射と、柔らかい感觸とを有つ秋の陽光に包まれてゐる代々木の森！ 私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら、幾度其處を通つたことだらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。或時は、

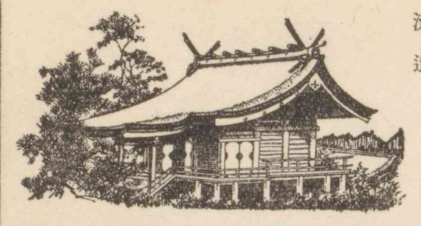
獻(献)

六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲で森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだ！ さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、生みの親の墓に對するやうな強い懐かしさで充溢された。そして、毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出来て、殿舎の形の次第に整つていくのが、堪らない程嬉しく思はれた。

その明治神宮がたうとう竣工した。嘗て赤い土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも列んで、烈しい

流造



日に光つてゐるのが見えた處には、今、清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にかやらすつかり見違へるほど美しい景色になつて、森嚴と幽邃の趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造ながれづくり素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域！ 眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土。私は始めて完成した明治神宮の御苑に立つた時、その改まつた光景を見て、今さらのやうに強烈



な感激に打たれた。何者の力が、この新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隠れた部面に働いた強い力こそ、實にこの明治神宮の基礎を千載不動の固さに築き上げたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖徳と、海よりも深い昭憲皇太后の御懿徳と、そして、この二柱の大神の恵に對へ奉る國民の至純な感謝の心情と、この三つのものが陰に陽に工程を捗らせて、遂にこの記

念すべき大工事を完成するに至らせた原動力であることは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實である。

嗚呼！ 純粹な至誠の動機から出た青年團員の造營奉仕、百里二百里の遠方から、眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實にこの神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。かうして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。なんと美しい尊い事實であらう。今までの神社に曾て見たことのない明治

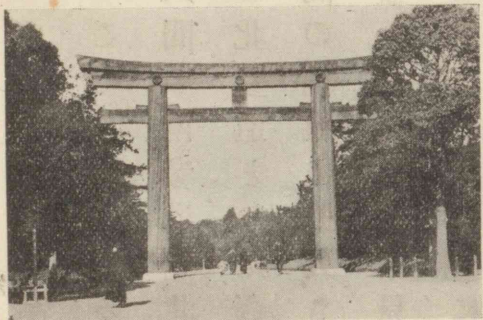
肅——肅

萬成
岡山市内の西北に
ある萬成山。

神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に来て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一にこのことを直感した。そして、一步步美しい小砂利の上を神殿に近く踏み入るに随つて、いよゝゝ肅然たる心持になつて、深く襟を搔き合はせた。

參道の兩側には、盡きること知らない密林が何處までも長く續いて、行くに随つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて、神橋の處へ來ると、どこからともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山縣萬成産まんなりの石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見

筑波山
茨城縣にあり、海
抜八七六米。



明治神宮大鳥居

ると、溪流の趣を模した風致のいゝ細流の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が今しも紅葉の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。

こゝは神苑中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總てが、繊細な技巧を排した自然的大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木のたえた處に、千七百四十といふ驚くべき樹

原宿・千駄ヶ谷
共に東京市澁谷區
にある地名。

土佐繪
大和繪、土佐權守
春日經隆よりその
稱が出た。

齡を重ねたといはれる、直立五丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、その高さは三丈九尺に達するとのことだ。この鳥居のある處は、南方原宿方面から來てゐる幅員八間の南參道と、北方千駄ヶ谷方面から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、こゝから左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ばつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

木曾

長野縣西筑摩郡に
ある木曾山。

御社殿は、樓門・拜殿・本殿等の建造物を併せて、その總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て



明治神宮本殿

造られてある。近く拜殿に登つて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、いかにも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、即ち神靈のおはします内院で、衆庶のみだりに窺ふことを許されない神

聖な場處である。

何事のおはしますかは知らねども

何事の云々
西行法師の歌。

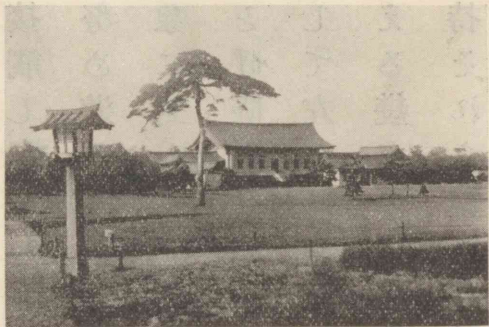
かたじけなさに涙こぼるゝ

私は、默禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、なんといいふ明るい快い感じをもつた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が皆暗い周囲から来る鈍い光波の中に、静寂な、しかし陰鬱な感じをたゞよはせてゐる中に、この神宮ばかりは、隠す處のない心持で、十分な光線に總てを解放し、總てを暴露して見せてゐる。然も、それでゐて決して淺露な心持はせずに、却つて一層深く大きくされた静寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな強い威力が迫り寄るのを覺える。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀し

た宮だといふことが出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠まつてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して新文明を吸収しようとお努め遊ばされた明治天皇の活動的進取的闊達な御氣象に對して、この明るいお宮の感じが、いかにもびつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。拜殿を中心にして左右に均齊を保ち乍ら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして、その奥に便殿の遠く望まれる心持、それら總てが又たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亙る森林帯があつて、その向ふ、廣く開けた明るい視野の中に、目

の覺めるやうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、また莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。こゝらに來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶び、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目に着く。寶物殿へ行くまでの道には、ずっと長い間さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は形式を中古時代に取り、その材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用し



明治神宮寶物殿

日本製鐵株式會社
福岡縣八幡市にある製鐵所。

た日本製鐵株式會社製の鐵材は、約十二萬貫に及んだといはれてゐる。後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を繞つて、若々しい楓の樹が美しく植ゑ列ねてある。私は寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の枡形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり、左右兩側にある古雅な木柵を繞らした一構は、即ち明治天皇、昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、いづれも御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまま、で、殊更技巧を弄しないところになんともいへない

しをらしく



蒲菖の内苑御舊

優雅な趣致がある。この御苑は、兩陛下の御在世中、殊に御愛賞あそばされた處で、高くそびえてゐる松を背景にした芝生の上に點在して、しをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連なりつゞいてゐる櫟や檜の雑木林にも、東京近郊では到底見ることの出来ない野趣がある。

私は此等を一わたり拜見し廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので、御門を出た。

振返つて見ると、神殿のあたりはもうすつかり深い霧に包まれて、黒々と晝でも暗い程生ひ茂つてゐる樹林の中をかつきりと切り開いたやうに、路線の白色が暮れ残つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、その神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、何時までも長く鑄つけられたやうに残つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な幽邃な優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果してこの深い印象を忘れる日があるだらうか。(明治神宮記)

北原白秋

名は隆吉。詩人。
歌人。福岡縣の人。
明治十八年生。

二 明治天皇の御製

北原白秋

明治天皇は現神としての大自覺に立たせられた。この神ながらの道に立ち、まことに聖帝として萬民の景仰を受けさせられた。その御製を拜するにまことに王者の御風格が大御心を通じて、蒼穹のごとく、天日のごとく、十方四海に光耀してわたらせられる。歌がらといふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には鞠躬如たらねばならぬ。帝王と凡下とは自らにして違ふ。これは天意であつて、いかんとも爲すすべはない。あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

御製は自らな歌調で、御歌所の歌調を遙かに超越しておはせられる。ある歌人が萬葉調でおはせられぬといふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製の御製たるところではないか。何となれば大帝の御製は實に大帝の御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て批判し奉るべきで無い。形式以上の大稜威がそのまゝの帝王調として流露し光被してゐる。私どものひたすら欽仰し奉る所以は實に茲に存するのである。眞の王道こそは大帝の立たせたまうた絶對無二の天の道であつた。現神としての御自覺そのものが、既に一

の宗教でおはせられた。御製を一々拜誦するに、その殆ど總てが皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を慈み、四海の和平を希ひ、異民愛撫の御聲ならぬはない。これ我が國民の深く感佩し奉るべきところである。大帝は、人たるの道子たるの道、言の葉の道を、あくまでも實に即いて御詠み遊ばされた。その中には教訓中の教訓、道歌中の道歌として、純藝術以外の見地から拜せられる御製も少くないが、純藝術と拜し奉るべき御作品も亦頗る多い。世の教育家・宗教家・道學家たちは、御製の眞純なる御風格を冒瀆し奉つて、その各自の道の爲に牽強附會してはならぬ。何となれば、大帝の御製は理趣のための理趣でなく、一に

王者としてのさながらの御詠歎であらせられたからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製によつて、大帝の御一面をうかゞひ奉つても、私はほと／＼歌人としての大帝を思慕し奉るの情に堪へない。

誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる。よつて私は敢て茲にその種の御製を謹鈔して、歌壇の人々の拜誦を希はうと思ふのである。

庭 菊

この秋もところ／＼にきくの花

うゑてたのしむ九重のには

をりにふれて

庭のおもは若葉しげりてすゞかけの
花さく頃となりにけるかな

朝 顔

しばがきにまとひあまりて萩の葉の
末にもさけり朝顔の花

秋 風 寒

宮のうちもふくかぜさむくなり
にけり 山べはいまや時雨ふるらむ

土 筆

庭のおもの芝生がなかにつくくし
植ゑたるごとくおひいでにけり

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらむ
庭の薄もほにいでにけり

をりにふれて

冬がれの芝生の董さきにけり
小春の日影さしわたりつゝ

雨中萩

すゑまではまださきみたぬ秋はぎの
花うちみだり村雨ぞふる

禁庭萩

昔わが折りてあそびしはぎの戸の
花もこのごろさかりなるらむ

秋月明

ともしびをかゝげぬ方に來てみれば
いよくあかし秋の夜の月

里

うつせみの代々木の里はしづかにて
都のほかのこゝちこそすれ

をりにふれて

かちどきをあげてかへれる軍人
まぢかく見るがうれしかりけり

董

をさな子につませまほしと思ふかな
董花さく庭をめぐりて

子

思ふ事おもふがまゝに言ひいづる
をさな心やまことなるらむ

蝸牛

世のさまはいかゞあらむとかたつぶり
をりくゝ家をいでて見るらむ

田家雨

軒あさきしづがふせやは降る雨も
たゝみのうへにうちしぶくらむ

電燈

あきらけき火影ひきたる庭みれば
雨はふりながら月夜なりけり

見花

高殿の窓てふまどをあけさせて
よもの櫻のさかりをぞみる

何等の滞りもあらせられぬ。その思無邪は天の思無邪である。良寛の歌はいゝと云ふ。併し、良寛以上に大帝の御製は眞率で無心であらせられる。良寛は天成の

思無邪
「詩三百、一言以テ之ヲ蔽フ。曰ク、思邪ナシ。」
良寛 (論語)
俗名山本榮藏。越後出雲崎の歌僧。天保二年(四九二)歿、年七十四。

童心者であつたであらう。併し、かの無思邪思無の境涯は禪家としての修道と忍苦とから更に深められて、始めて幼子の心に還つたものに違ひない。大帝は自らそのままであらせられる。禪家の悟入やそれに付き纏ふいやみが些かもあらせられぬ。この純真無垢こそは天意である。良寛の歌を渴仰する歌壇にかくの如き大帝の御製のある事を恭禮しまつらないのは不思議である。

所謂大古にして大新、蕩々乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御心であらせられるものを。

(季節の窓)

三 菊 と 婦 人

棚橋 絢子

棚橋絢子
教育家。東京高等
女學校長。大阪市
の人。天保十年二
月誕生。

菊の花が、歌に詠まれ、詩に作られ、文章に書かれ、挿花にされ、花壇に植ゑられ、或は繪畫として、或は衣服の模様と



花 菊

して、種々の裝飾や娛樂に供せられるのは、昔からのことでもあります。さうして、永い年月に亘つての此の花の培養の

結果は、殆ど理想的のものを作り出しました。これを人間に喩へますれば、模範的婦人であらうと思ひます。こ

紫式部
藤原宣孝の妻。平
安朝時代の女流文
學者。

れが比を古人に求めますれば、辛うじて紫式部ぐらゐがこれに當りませうか。天地間の美は多く花に集り、花の美観は千姿萬態であります。菊の花のやうに、色彩が豊富で、香氣が芳しく、風姿が高尙優美で、生命の長いものはありますまい。また菊の花のやうに、紅白濃淡さまざま、な清い美しい色を有するものはありますまい。さらに菊の花のやうに、嗅感を痛めない、程のよい清香を送るものもありますまい。然も風姿が優婉で、高ぶらず、僻まないのが、やがて皇室の御紋所となつて、竹の園生に影を現す所以であります。タリヤなども美しいには相違ありませんが、其の姿から

して到底菊に及ぶことは出来ません。

また菊は其の本末が直く、歪み曲ることを忌むものがあります。さうして、菊ほど柔順で素直なものはありません。すまい。培養の方法によつては如何様にもなります。大きな輪の菊の花でも、構はずにおくと小さくなりますが、其の反對に、小さい輪の菊の花でも、育て方によつては随分大きくなります。かやうに、菊は婦人の特性、殊に柔順の徳を表してゐます。婦人はもとより素直で柔順でなければならぬのであります。

(女らしく)

芭蕉

姓は松尾、名は宗房、別號桃青。俳人。伊賀國(三重縣)の人。元祿七年(一七〇〇)歿、年五十一。

千代

江戸時代の女流俳人。加賀國(石川縣)の人。安永四年(一八〇五)歿、年七十四。

嵐雪

姓は服部。俳人。淡路國(兵庫縣)の人。寶永四年(一七二七)歿、年五十四。

蕪村

姓は與謝。俳人。攝津國(大阪府)の人。天明三年(一八二二)歿、年六十八。

子規

姓は正岡、名は常規。俳人。歌人。松山市の人。明治三十五年歿、年三十六。

四 白 菊

白菊の目に立てて見る塵もなし

芭蕉

白菊やべにさいた手のおそろしき

千代

黄菊白菊その外の名は無くもがな

嵐雪

二本づつ菊まゐらせん佛たち

蕪村

どつさりと山鴛籠おろす野菊かな

子規

五 秋 空

中西悟堂

秋空はみどりにひろがり、

深くふかく

やはらかに

私たちの上に君臨する。

樹樹のすがたの明らかさよ、

人人のすがたの親しさよ、

豊かにつらなる大地のかなた

中西悟堂
詩人。金澤市の人。
明治二十八年生。

地平から地平へかけて
 優しく蒼く
 天空はひるがへり、
 光と共に
 宏大な幸さいはひをふりそそぐ、
 あらゆる人人の
 あらゆる先祖たちから
 私たちに至るまで常に優しかった天空、
 永劫えいごふにわたつて

儼げんとして光輝に満ちてゐた天空の
 永い深い心が、
 今、秋に澄んで
 唳りやうりやう唳と鳴りわたるやうに
 私たちの上に笑ひ、
 私たち、さわやかさに充てる者らは、
 野の光をつらぬいて歩きながら、
 明快な樹の下に憩ひながら、
 よき天空を讃嘆する。

五十嵐力
文學博士。早稻田
大學教授。國文學
者。米澤市の人。
明治七年生。

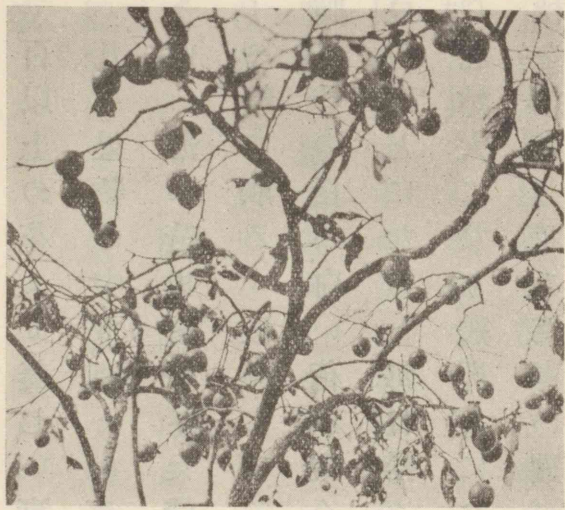
六柿

六柿

五十嵐力

我が家の庭には六本の柿がある。その一本は名を衛門と云つて、澁柿の中の大将株と云はれるものである。普通樽柿にするのがこれで、若い中に澁を抜けば、さくさくと齒がかりのあるのが食はれる。やゝ熟したのをさはせば、もやくくと柔らかいのが食べられる。霜に飽かして黒味を帯びるやうになつたのをもいで来て、棚に並べて澁の抜けるのを待てば、甘露の凝つたやうなのが啜られる。

私が此の木を植ゑたのは、明治四十年の秋であつた。



柿

高さはやうやく一間餘り、幹は子供の腕ほどのものであつたが、何となく萎縮けたやうで、枝も伸びず、花もろくろく咲かず、随つて實も結ばない。もどかしさに枝先を剪り込みなどして生氣の回復するのを待つて居るうちに、新しい土地に縁づいて固くなつたしこりが段々ほぐれて來たと見えて、三四年目から盛んに花をつけ出して來た。そして一昨年は、申し譯のやうで

六柿

三

はあつたが、とにかく一箇の大きい實を結んだ。それが去年は二十幾箇を結ぶやうになり、今年は大飛びに飛んで、百以上の花より美しい實を見せるやうになつた。

凡そ果物の中で、柿くらゐ人の心を動かすものはあるまい。薄い黄味を帯びた透き通るやうな新芽は、袖や帽子や箒の觸るゝ度毎にぼろりと缺ける。其の中に脆い、首の長い、白い花が咲く。やがて實が見えて、それが豆粒ほどになると、毎日掃くやうに地に落ちる。それから慈姑大になり、鶏卵大になる。其の間をりくゝ豊富な秋を約束してゐた青い實が、頻りに枝を離れてぼたりぼたりとみじめな亡骸を地上に横たへる。秋になつても

う大丈夫と胸を撫で下ろして居ると、やがて八朔二百十日の大暴風雨が襲つて来て、大きくなつた實を容赦なく枝と共にもぎ取つて行く。赤い姿を枝先に現して人の目を悦ばすやうになると、今度は其の美しい色が鳥の目を惹き、悪太郎の心を惹いて、無残な嘴や石ころに傷つけられる。

僅かに一箇・二箇ではあるが、半年の間に續いて起る斯様な災厄を危く免れて私共の口にはひる貴重な一箇・二箇である。その一箇が一年にして二十箇となり、又一年にして百箇となるのを見る喜びを何に譬へよう。徒然草の兼好法師は、此の世のほだし持たらぬ身に、たゞ空の

兼好法師

吉田兼好。本姓ト部。鎌倉時代の文學者。正平五〇二〇年歿、年六十八。此の世のほだし云徒然草第二十段。

手しほ。

名残のみぞ惜しき。」と云つて居る。私は世のほだしも澤山にもつて居るが、空の名残、自然界の名残、殊に手しほにかけた草木の名残は、取りわけ私に取つて盡きせぬ未練である。「柿の未來を考へるだけでも死なれない。」と私が茶飲話によく云ふ戲談は、實に腹の底から湧き出る眞の私の聲である。

一本の名は鶴の子である。これは實の形や大きさが鶴の卵に似て居るからの名であらう。或は其の色が、あの品のよい大鳥の丹頂に似てゐるための名かも知れぬ。或は其の形が、嘴を縮め、翼を收め、足を隠した長丸い團栗式の鶴に似て居る爲の名かも知れぬ。此の柿の特色は、

早熟の點にある。堅い齒ざはり、水氣の乏しい味、いづれも人に舌鼓を打たせるほどのものではないが、九月に入る匆々、瓜に次ぎ無花果に並んで秋の味はひの先驅をする所に、他の後詰の優秀者の及ばぬ價值がある。青いながらに熟して高い秋の眞味を暗示するところや、こましやくれた相貌をして旗持・喇叭吹の役を勤めるところなども、いはゆる新人の生活を象徴してゐるやうに見えて、何とも云はれぬ面白さである。

我が鶴の子は衛門と一緒に四十年の秋に買ったので、もとは大人の拇指位のものであつたが、翌年から花を持ち、その翌年には數箇の初生を見せて、今ではもう、一年お

きに五十顆乃至百顆を結ぶやうになつた。年毎にずんずんとふとつて行くのを見ると、數年後の未來が待ち遠しさに胸も躍るばかりである。鶴の子のお馴染は、同じやうに未來に富んでゐる子供等で、皮ごとにむしやむしやと食べる無邪氣な仲間の喜びは、常に此の鶴の子に集つてゐる。

一本は名を禪寺丸といつて、黒砂糖式の甘味を持つた柿である。しかし、其の黒砂糖式の甘味は、場末の菓子屋の餅菓子に見るやうな味はひである。此の柿の味はひのとりえは、硬からずとろけざる間にある。古代風の黒ずんだ赤味を帯びて、柔らかいながら手ざはりのしなし

なする丸々した奴に、皮ながらかぶり附いて、舊都式の甘味が齒に沿うて唇に流れ出るのを啜る時の心持は、實に類ひない風味である。少し尖りめのたつぷりした丸い形、厚味のある古代風の赤い色、柿の中で最も柿らしい外觀を備へたのはこの禪寺丸であらう。

一本は縞御所。これは名なしのまゝで買ひとつたので、私共は偶然にも養ひ親、兼名づけ親になることになつた。形は蜂屋そつくりで、蜂屋よりは少し小さく、皮に美しい青みがかつた縞があり、そして甘露を啜るやうな味は、品のよい御所柿そつくりである。年々なる數は極めて少いが、色と形と味との三方面に於て、類ひなき高尚な

趣味を見せてくれるのはこれである。

私は他日、植木屋から、或は果物屋の店頭から、或は書物から、此の柿の本名を知ることがあるかも知れぬけれども、少くとも我が庭に於ては、長く縞御所の名を改めたくないと思つて居る。

一本は妙丹といふので、私の家では又梨柿とも呼んでゐる。黄味の勝つた赤色で、平たい、大きい、尖頭の窪んだ、そして熟すると、笑みわれるといふ特色を持つて居る。味はひ盛りは張切つてまだ笑みわれぬ境にある。硬性が極度に發達して、まだ柔性に轉ぜざる頃合ひにある。ナイフを當てれば、ぱりつと弾けて割れ、齒に掛けると、さ

くさくと梨子を食ふやうな音がする。そして多量の水氣を含んで、ざらめ糖のやうな淡泊な上品な甘味がする。色といひ、形といひ、味といひ、禪寺丸や衛門や縞御所とは全く反對してゐるが、同時に他の種類の全く眞似られぬ特殊の風味を持つてゐる。柿の中の最も柿らしからざるものであるが、しかも捨てがたい味を有つたものは是である。

大正天皇がまだ東宮におはした時に、此の柿を好ませられて、遙かに濃尾地方から御取寄せになつたとかいふことを三四年前聞いたことがあつた。我が庭に養はれて、やんごとなき新しい縁故をもつて居るのも、また此の

三四年前
大正五年より。

柿である。

最後の一本は、まだ名を持たない。名を持たずに養はれて来て、未だに名を與へられずにゐるのである。此の柿は六本の中で最年長者で、幹も一番太つて居るが、買ひ取られてから七年になりながら、今に一箇の實をも見せた事がない。察するに、大きくなつた養子が養家に馴染まぬやうに、里離れの苦痛に心を取られて、まだ新しい土地に順應し得ぬのであらう。痛ましい事である。が一つ怪しいのは、年々多くの花を見せることで、枝一ぱいに穢いほど咲きながら、つひぞ一つの實をも止めぬのはどういふ心であらうか。私は此の一本に對してしば／＼

特別の手當を施した。寒肥も多くやつた。二三度も枝先を剪りこんだ。冬は鹽俵で根本を包んで寒氣を防いでやり、夏は棕櫚の毛を幹に巻いて蟻を防いでやつた。それから五六年になるが、未だに何の反應もない。私は彼を買ひ取つた其の年から、一度實を見て名をつけようと待ちかまへてゐる。彼は遂に名無くして一生を終るのであらうか。年々夥しい花を見せるのみで、遂に一箇の實をも結ばぬのであらうか。たゞしは氣永に我が心遣ひの厚薄を試みた後に、大器晩成の大豊饒を以て報いるつもりであらうか。名無き柿よ、汝は我が庭の謎である。

此の外にも我が庭に迎へようと思ふ柿は数々ある。甘露の凝つたやうな味をもつた御所柿もその一つである。御所柿に似て更に大きい百目もその一つである。先尖りの橢圓の大きな實で、風變りの濃密な味を與へる蜂屋も其の一つである。木が痛々しく見えるほど枝を撓めて、隙間もなく眞赤に實のる身不知もその一つである。徑四寸程の素晴しく大きな實に凡ての仲間を壓倒して日本一を誇るやうに見える開山もその一つである。柿は其の實の色と形と味との凡てにおいて、我が秋の庭に於ける主人公である。私は曾て我が庭に柿の字の扁と旁とを續けて木市園と名づけた事があつた。木の

市に圍まれて、緑の空氣を十分に吸ふ事が出来れば、私の半分の望は足りる。柿の木に蔽はれて甘い實を十分に味はふ事が出来れば、他の半分の望は足りる。葉や大根や蕪の葉を隙間もなく敷き詰めた緑の絨毯を地上の背景とし、高く澄んだ青空を天上の背景として、無骨な柿の本に眞紅の瓔珞を綴る柿よ、花紅葉の美觀と果物の美味とを併せ與ふる柿よ、秋の趣味の凝つて成つたやうに見える柿よ、汝は我に取つて秋の旗標であり、そして秋の王である。

(我が書簡)

徳富蘆花
名は健次郎。小説家。熊本縣の人。昭和二年歿、年六十。

七 相模灘の落日

徳富蘆花

秋冬風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕べ、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとも思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、その全く沈み終るまで、三分時を要す。

初め日の西に傾くや、富士を始め相豆の連山は煙の如く薄し。日は謂はゆる白日、白光爛々として眩しきに、山も眼を細うせるにや。

日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、次第に紫になる

なり。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金

煙を帶ぶ。

此の時濱に立つて望めば、落日海に流れて、吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

かゝる風の夕べに、落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍するの感あり。莊嚴の極、平和の至、



逗子
神奈川県三浦郡逗子町

凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に佇むを覺ゆ。

物あり。融然として心に浸む。喜びといはんは過ぎ、哀しみといはんは未だ及ばず。

已にして日愈、落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の巔、舊によつて紫上更に金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜みそめぬ。日一分を落つれば、海に浮かべる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸分又分、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ちゆく。已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切

れて線となり、線瘦せて點となり、——忽ちにして無し。眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。

日は入りぬ。しかも餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿後、實にかくの如し。日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き苧藍色となり、日の遺孽わすれがたみとも思ふ明星の、次第に暮れゆく相模灘の上、に眼を開きて、明日の日の出を約束するが如きを見るなり。

(自然と人生)

夏目漱石

名は金之助。英文
學者。小説家。東
京市の人。大正五
年歿。年五十。

八霧の倫敦

夏目漱石

昨夜は夜中、枕の上で、ぱちくぱちくといふ響を聞いた。これは近處にグラハム・ジャンクシオンといふ大停車場のある御蔭である。このジャンクシオンには、一日のうちに汽車が千幾つか集つて来る。それを細かに割り附けて見ると、一分に一列車ぐらゐづつ出入りをする譯になる。その各列車が、霧の深い時には、何かの仕掛で停車場間際へ來ると、爆竹のやうな音を立てて相圖をする。信號の燈光は、青でも赤でも全く役に立たないほど暗くなるからである。

寢臺を這ひおりて、北窓の日蔽ひを捲きあげて、外を見

煉練鍊

おろすと、外は一面にぼうとして居る。下は、芝生の底から、三方煉瓦の塀に圍はれた一間餘の高さに至るまで、何も見えない。たゞ空しいものが一杯詰つて居る。さうしてそれが、しんとして凍つて居る。隣の庭もその通りである。この庭には綺麗な芝生があつて、春先の暖かい時分になると、白い髻をはやしたお爺さんが、日向ぼつこをしに出て来る。その時このお爺さんは、何時でも、右の手に鸚鵡を留らせて居る。さうして自分の目を鸚鵡の嘴でつゝかれさうに近く鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、頻りに鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を曳いて、間斷なく芝刈器械を芝生の上に

轉がして居る。この記憶に富んだ庭も、今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿のそれと、何の境も無く、のべつに續いて居る。

裏通を隔てて向ふ側に、高いゴシック式の教會の塔がある。その塔の、灰色に空を刺す天邊で、何時でも鐘が鳴る。日曜は殊に甚だしい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石を不揃ひに疊み上げた胴中さへ、ありかがまるで分らない。それかと思ふ處が、心持黒いやうでもあるが、鐘の音はまるで響かない。鐘の形の見えない濃い影の奥に深く鎖された。その二間を行きつ表へ出ると、二間許り先は見える。その二間を行きつ

ゴシック
西洋建築の様式の
一。その特長は、
アーチの上端、高
塔の頂、皆鋭く尖
つて、天を衝く趣
きがある。

くすと、また二間許り先が見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩くほど、新しい二間四方が現れる。そのかはり、今通つて來た過去の世界は、通るに任せて消えて行く。

四つ角でバスを待合はせて居ると、鼠色の空氣が切り抜かれて、急に眼の前へ馬の首が出た。それなのに、バスの屋根に居る人は、まだ霧を出きらずに居る。此方から霧を冒して飛び乗つて下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりして居る。バスが行き逢ふ時は、行き逢つた時だけ、綺麗だと思ふ。思ふ間も無く、色のあるものは濁つた空の中に消えて了ふ。漠々として無色の裏に包まれて

行つた。ウエストミンスター橋を通る時、白い物が一二度眼を掠めて翻つた。眸を凝らしてその行方を見詰めて居ると、封じ込められた大氣の裏に、鷗が夢のやうに微かに飛んで居た。その時、頭の上で大時計が嚴かに十時を打出した。仰ぐと、空の中でたゞ音だけがする。ヱクトリヤで用を足して、テート畫館の傍を河沿ひにバタシーまで來ると、今まで鼠色に見えた世界が、突然と四方からぼつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く身の周圍に流したやうに、黒い色に染められた重たい霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふほど濕つて居る。薄い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足許は

無論穴藏の底を踏むと同然である。

自分は、この重苦しい茶褐色の中に、暫く茫然と佇んだ。自分の傍を人が大勢通るやうな心持がする。けれども、肩が觸れ合はないかぎりには、果して人が通つて居るのかどうか疑はしい。その時、この濛々たる大海の一點が、豆ぐらゐの大きさに、どんよりと黄色く流れた。自分はそれを目標に、四歩ばかりを動かした。すると、或店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中では瓦斯を點けて居る。中は比較的明らかである。人は常の如く振舞つて居る。自分はやつと安心した。バタシーを通り越して、手探りをしないばかりに、向ふ

の丘へ足を向けたが、丘の上はしもた屋ばかりである。同じやうな横町が幾筋も並行して、青空の下でも紛れ易い。自分は向つて左の二つ目を曲つたやうな氣がした。それから二町ほど眞直ぐに歩いたやうな心持がした。それから先はまるで分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けて居た。右の方から靴の音が近寄つて來たと思ふと、それが四五間手前まで來て止つた。それからだんく遠退いて行く。仕舞には全く聞えなくなつた。あたりはしんとして居る。自分は、暗いなかたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。

(漱石全集)

小宮豊隆
評論家。東北帝國
大學教授。福岡縣
の人。明治十七年
生。

番町
東京市麹町區にあ
る。

九ドイツの女

小宮 豊隆

ベルリンで私の下宿してゐた家の主人は、元大きな本屋の支配人とかをしてゐたのださうで、當時はなんにもしてはゐなかつたが、相應に裕福に暮してゐるらしくかつた。理科大學に通つてゐる息子と妻君との三人家族に、下女を一人使つて、彼等は東京で言へば番町とでもいつたやうな閑靜な屋敷町の、どつしりした建物の、表の一階に住んでゐた。息子は丁度二十歳、妻君は四十五六か、もう少しは上かぐらゐの年配であつた。この下宿に來て先づ驚かされた事は、朝飯を宿にたの

んだら、妻君から、あなたは紅茶を何杯めしあがるかと、聞かれた事であつた。當時私は朝飯に、パンの外に半熟の卵を食べる事にしてゐた。その卵では、ホテルで五分とか三分とか、時間で注文する事に慣れてゐたのだから、此所で少しも當惑する事がなかつた。然し、紅茶を毎朝何杯めしあがるかは、自分といへどもはつきりとは分らなかつた。咽喉が乾いてゐれば、二杯でも三杯でも飲む。乾いてゐなければ、一杯の半分しか飲まない事もある。日本にゐても、又こつちのホテルに泊つてゐても、そんな事は、その時々、の腹工合で適宜に取計らつて、少しも不都合のなかつた事である。——然し、今さう言つて聞か

れる以上、たとひ是までの習慣はどうであらうと、兎も角も、何杯ときめて返事をしなければならぬ。仕方がないから私は、二杯と答へた。二杯とさへ言つて置けば、飲みたくない時には残して置けばいい、飲みたい時でも、さう三杯も飲みたい時はめつたにないと考へたからである。

次いで驚かされた事は、風呂の事であつた。風呂を沸してくれと注文すると、妻君が、お風呂は何度の熱さに沸しますかと、聞き返した。是も紅茶同様、日本では出鱈目で通つて來た事である。温ぬるければ焚かせる、熱ければうめさせる。何度のお湯が丁度好い湯加減だなどといふ

事は、計つて見た事もなければ、また計つて見ようと考へた事もない。第一私は、何度のお湯は熱くて、何度のお湯は温ぬるいかも、よく知つてはゐなかつたのである。然し、是も聞かれて見れば、返事をしない譯には行かない事であつた。それで私は、可い加減に、四十度と答へた。三十六度は我々の平熱である。四十度と言へば、大熱であつた。それから思ひついて、私は四十度と答へたのであつた。もしそれで熱すぎたら、その時は水をうめるまでの事だ、といふのがその時の私の肚であつた。

その後、毎朝フランスパン二つと三分の半熟卵二つと紅茶二杯とが、きちんくと私の部屋に運ばれ、風呂には

いつも四十度のお湯が沸され、私は黙つて、その風呂にはひり、そのパンを食べつくし、その卵を食べつくし、その紅茶を飲みつくした。銀製の紅茶沸しに入つて来る紅茶は、紅茶茶碗に丁度二杯分あつて、決して多すぎる事も、少なすぎる事もなかつた。風呂の中には寒暖計が浸けてあつて、その寒暖計は、いつも必ず四十度の所をさしてゐた。

それが初の内は、私に、妙に窮屈な、いやな感じを與へた。なんだか、兵營か病院かにはひつてゐるやうで、勝手な時に勝手な事の出来ないもどかしさがあつた。然し、それも段々馴れてくると、結局氣樂でよいやうにも感じられ

出した。

紅茶がもつと飲みたければ、今日一日だけ我慢すれば、明日からは、もう一杯分餘計にしてもらへばよかつた。もう少し熱い風呂にはひりたければ、今日一日だけ我慢すれば、この次から、もう一度でも、もう二度でも、望み次第熱くしてもらふ事が出来た。日本にゐる時のやうに、一に小言をいふ必要もなし、小言を言はれる方から言つても、そのたびに一々まごつく必要もなかつた。——勿論、人間の事だから、細かな所は、決して數字などで現す事の出来るものではなかつた。従つて數字に頼る事にすれば、結局可い加減な所でお互に妥協しなければならぬ。

のは、知れ切つた事であつた。それでもこのやり方で都合のよい事は、多少我慢する氣になりさへすれば、割に自分の希望に近い所まで、相手に具體的な標準を示す事が出来るといふ點であつた。

然し、そんな事よりもつと大事な事は、このやり方が非常に經濟的なやり方であるといふ事である。二杯しか飲まない紅茶の湯をわざ／＼三杯分沸すのは、紅茶も無駄になるし、お湯も無駄になる事である。四十度のお風呂にしかはひらない人間に、四十二度のお風呂を沸すに至つては、ガスを無駄に使ふ事夥しいものである。——この妻君が私に先づ、紅茶を何杯めしあがるかと訊き、何

度のお風呂にはひるかと思つたのも、結局初からそれを承知して置いて、一度でも無駄な力を使ふまいとする深い用意から来たものに違ひなかつた。

ある朝湯殿から歸りに、臺所の横を通り抜けたら、この妻君が、私のための朝食の用意をしてゐた。見るともなぐその方を見ると、妻君は、一方ではガスの火でお湯を沸しながら、一方では紅茶を頻りに秤にかけてゐるのである。――私は又しても驚かされた。妻君は恐らく、紅茶茶碗一杯の紅茶を入れるには、お湯が何度か熱さに沸き、紅茶の分量が何分何分あれば、丁度好い味が出るといふ事を心得てゐて、それを標準に、湯を沸し、紅茶を秤にかけ、

さうしてそれを毎朝、私の部屋まで運んで来てくれるのであらう。是は、無駄を省くといふ點から言へば、正に一番合理的な方法であつた。同時にまた是は、その材料を十分に使ひ切るといふ點から言つても、一番能率的な、――従つて一番經濟的な方法であつた。

――是は極めて些細な日常生活上の出来事であるに過ぎない。また、出来るだけ無駄な事をするのでなければ、自由を享樂してゐるやうな氣のしない我々日本人からいふと、是は餘りにも合理的でありすぎ、また餘りにも能率的でありすぎ、妙にこち／＼してゐて、人間らしくのびのびした感じのない、いやなやり方であるとも、考へら

れない事ではない。

然し、もしこのやり方が日常の生活に於て徹底するのみならず、それで十分に鍛錬された者が、それを更に、もつと大事な、精神生活に於て徹底させようとするならば、このやり方は、既にそれ自身恐るべき威力であり得る事は、説明するまでもない事である。

あらゆる科學の進歩は、決して無駄な事をしまいとする所から生まれる。また、すべての材料を出来るだけ、能率的にし十分に使ひ切らうと努力する所から生まれる。さうして、ドイツの學問もしくはドイツの精神文化を特色づけて、最も著しく他國と區別するものは、實にこのやり方における徹底である。

是は無論、ドイツ人の國民性に根ざすものであるには違ひなかつた。然し、ドイツの女たちが、その日常生活に於て訓練された所のものを、自分たちの子供に、無意識・有意識に吹き込んである事が、特にその國民性を一層力強く發達させてゐるに違ひない事も亦、否定する譯には行かない事である。

(黄金蟲)

山田邦祐
美術批評家。福岡
縣の人。

一〇 落穂拾ひ

山田 邦祐

廣い農場は今刈入の最中である。金色に稔つた小麥が刈り取られてゆくと、男や女、すべての農夫たちが、絶えず忙しきうにそれを集めてゆく。一方では、それを束ねる農夫たちがゐて、瞬くうちに小麥の束をこしらへてゆく。その束は四輪馬車にうづ高く積み込まれて、農場近くの納屋へと運ばれてゆく。そこには刻々に小麥の山が築かれてゆく。眼を轉ずると、農場の遙か彼方を馬に乗つた監督が駆け廻りながら、農夫たちに指圖をしてゐるのが見える。

さうしてゐるうちに、落穂拾ひの人たちが農場にあらはれて来て、そこら一面に撒き散らされてゐる小麥の落穂を拾ひ集めにかゝるのである。この習慣はずつと昔からあるもので、誰がこの落穂を拾ひに來ても、農場では別に抗議を申し出るやうなこともなく、公然の一つの仕事となつてゐるやうである。これに關しては、古のヘブライ人の間には、一つの嚴肅な宗教的の解釋があつた。「汝が、汝の農場を收穫をする時には落穂拾ひの人たちを厄介拂ひしてはならぬばかりでなく、さういふ人たちに、自由に落穂を恵まなくてはならぬ。貧しき人々や旅人の群に落穂を與へることは、汝等の一つの義務である。」

又これに關して、更に他の解釋があつた。「落穂拾ひは孤
 兒や寡婦のために。さすれば、主なる汝の神は汝のすべ
 ての仕事の上に祝福を垂れるであらう。」
 かうした風習は、今も尙フランスに遺つてゐて、小麥畑
 の所有主は、自分の農場の刈入あとの落穂拾ひを、若し拒
 絶するやうなことがあるれば、必ず凶作に出會ふといふこ
 とを信じ切つてゐる。こゝに面白いことは落穂拾ひの
 人たちは、永い間の習慣上の訓練から、白晝に限つては小
 麥の穂を拾つて歩くが、夜陰に乗じて小麥の束をそのま
 ま盗み出すやうな不正直者を、未だ曾てその仲間から出
 したことがないといはれてゐる事である。



(筆 - レミ) ひ拾穂落

夏の晝近くである。太
 陽は照りがぶやいてゐる。
 落穂拾ひの足もとの影が
 短い。この落穂拾ひは三
 人の貧しい百姓の女たち
 である。彼女たちはお粗
 末ではあるが、仕事着をき
 ちんと身につけ、頭巾で髪
 を包んでゐる。額の影が
 眼のふちを隈どつてゐる。
 着物の襟は頸のあたりで

手頃にくりぬかれて、風通しがよきさうに見える。かうした扮装をした彼女たちは、針のやうに鋭い刈株の跡を踏んで、貴い小麥の穂を集めながら、あちらこちらと歩を移すのである。絶えざる努力に依つて、拾ひ集められた落穂は、いくつもの小さい束となり、次ぎ／＼に足もとに積み重ねられてゆく。

私たちは、この三人の農婦たちを、更に細かく観察して見ることも面白いと思ふ。彼女たちは、――娘・母親・老婆とそれ／＼に年が違つてゐるのを見出す。一番近く、右側に中腰に立つてゐる女が、三人のうちでは年長者であることがわかる。老婆は、長い間立ち／＼けてゐること

が堪へられないと見える。おそらく腰もこはばつてゐるのであらう。如何にも仕事をつゞけてゆくのが大儀さうに見える。その次の中央の農婦は、如何にも岩乗さうなからだつきで、がっちりとした物腰は重い荷物でも平氣で背負ふだけのゆとりが見える。その太い丈夫な腕は、どんなきつい仕事でも成しとげられさうである。

三番目の、左側の若い農婦は、極めてしなやかな風情があつて、どう見ても娘々してゐる。顔かたちから、頭巾の恰好、輝く太陽の光をさけてゐる頸筋の小さなケープなどから見ても、娘らしい情味がある。二人の年かさの農婦は、エプロンの端を折り曲げて、それに一々落穂を入れて

ケープ
肩マント。

あるが、この娘は他の二人のやうにエプロンをつけてゐないで、拾ひ集めた落穂は皆これを手に握つてゐる。更に、この三人のそれ／＼の動作に眼を移すと、三人が三人とも如何に違つた動き方をしてゐるかが容易にわかるであらう。エプロンの中に拾ひ集めてゐる二人は、握りしめた小麦の穂をもつた左手を一々その膝のあたりに休めて、進みながらも絶えずこの不器用な動作を繰り返してゐる。娘の落穂拾ひは、極めて敏捷に右手で拾つた麥穂を左手に、そしてその左手は、これを背の上に移して休めてゆく。この動作は徒らにからだを疲らせることがなく、而も極めて美しい姿である。かうして大地

を見つめながら前進しては止り、止つては前進してゆく落穂拾ひの人たちを見ると、恰も野原を不規則に飛び移つてゆく大きな蝗のやうでもある。私たちは、この三人の農婦の姿を見てゐると、皆が私たちの方へ今にも動き出して來はしないかと思はれるほどである。

この繪は、誠に線に於て美しい出來榮えを示してゐる。中央の農婦はぎこちない輪郭から成り立つてゐる。この生硬な線は胸部から右手の角度の線にあらはれ、更に顎と頸との角度にも、髪を包む頭巾のうしろの線にもあらはれてゐる。私たちは、かうした強い線によつて描き出された中年の農婦その人のもち味の不趣味さをさへ

感ぜさせられるのである。これに反して、若い農婦は美しい曲線で描かれてゐる。胸の線と背中の線とが、互に快い圓味を見せて楕圓形を形づくり、それが左手の線によつて、より完全な効果をあげ、更にさし延べられた右手の線が、背中の線と延びつゞいて、美しい線を見せてゐる。その他、可愛らしい咽喉の曲線、手の整調、頭巾の恰好よさなど、すべて處女の姿の魅惑を有つてゐる。

年老いた農婦の立像を描く線は、他の二人の農婦の方へ曲線をなしてゐるが、構圖の上から見て、この線の示す高さは、小麥の積み上げられた山の形とは違つた効果で、畫面全體のいゝ占めくゝりをなしてゐる。小麥の堆積

の山は遙か彼方の野面の中央に見えるが、その小麥の山の頂の線は、腰をかゞめた二人の農婦の背中の線と調和



(筆 - レミ) 鐘 晩

を保つてゐることも、注意しなければならぬ技巧であらう。

私たちは、この繪を他の作品と比較するとき、同じやうな構圖を見出すであらう。——前景に人物を置き、遠景に地平線を描くといふやうな場合の構

圖がそれである。然し、私たちはこの繪に於て、落穂拾ひの背景をなす遠景の如何に微に入り細に入った描寫で

ミレー
佛蘭西の畫家（西
紀一八四一—一八六五）

サロン
パリに於て春季に
行はれる美術展覽
會。

ルーブル美術博物
館
パリの中心セイ
ヌ河の北岸に聳え
る世界有数の博物
館。



（羊 - レミ）女の飼

あるかに氣附く筈である。更に「晩鐘」や「羊飼の女」と比較して見る場合に、前景の人物が地平線の上にまで抜け出てゐないところに、この繪の特色を見出す筈である。この繪は、「晩鐘」と同じやうに、ミレーの作品のうちでも、最もよく知られてゐる傑作の一つで、一千八百五十七年に、初めてサロンに展覽されたものである。現在はルーブル美術博物館に所藏されてゐる。

（世界名畫物語）

鈴木鼓村
名は映雄。音樂及
び音樂史の研究
家。宮城縣の人。
昭和六年歿、年五
十七。
團平
初代豊澤團平。義
太夫節の三味線彈
である。

二 玄妙の音

鈴木 鼓村

「御免なさいませ、團平のお師匠さんはこちらで。」と、海松布のやうな着物を着た乞食が、或日初代豊澤團平が住居の格子先へ立つた。

「お何や。どなたかいらつしやつたやうだ、行つて御覽。」と、女房は煙管を下に置きながら、長火鉢の前から聲を掛けて、臺所に立働いて居る女中を呼んだ。女中は濡れた手を前垂で拭きながら玄關に出た。さうして右の手で襷を外しながら敷居際に手をついて、障子をあけて來訪の客を見上げた。

「ちよつと、その何でございます、お師匠様にお目通りを、へい〜。」と、蓬頭垢面の物乞は、揉み手をしながら小腰を屈めた。

「あらつ。お前お貰ひぢやないか。おかみさん、お貰ひの癖に旦那さんに——まあ、どうでせう。」

女中は頓狂に叫んだ。

「何です、騒々しい、どうしたといふの。」と、女中の仰山な聲に釣られて女房も出て見た。

「このやうな服装みなりを致しまして、誠にはや何でございませうが、どうぞ一生の願ひでございませうので——へい、お師匠様にちよつと。」

「そんなことは出来ません。早く行つて下さい。それに何用か知らんがお師匠様もお留守です。さつさと行つて下さい。」女房は顔をしかめた。

「そこをどうか、一生の願ひでございませうので。」と、乞食はしつこく動きさうもない。

「何だ、騒々しい。」と、主人の團平は襖から、身體半分を出して玄關を見た。

「あなた、まあどうでせう。お師匠様にお目にかゝりたいなんで、ほんとに厭なお貰ひですこと。」と、女房の聲には角があつた。

やをら

「なに、お客様か。」と、團平はやをら玄關口へ出ようとした。

「およしなさい、お貰ひですよ。」と、女房は良人の袖を控へた。

「なに、ちよつとお目にかゝりさへすれば、もうはや、この世に望もございませぬので、へい。」と、格子先の聲にはうるみがあつた。

「一生の願ひで、はゝあ。」と、團平はたまらず障子際に出てしまつた。

「へい、一生の願ひでございしまする。」

團平はつと進んで、その海松布のやうな着物の珍客を

見た。さうして慌てたやうに、

「これはようこそ御尊來。さあ、どうぞ。」と、自分で格子をあけて、

ぐく

「こらつ、何をぐく／＼してゐるんだ。お洗足でも持つて來んか。」と、女どもを叱つた。さうして、今更のやうに恐縮がる乞食を通して、無理に上座に据ゑた。女どもは唯あきれて物もいひ得なかつた。

「むさい風體で、誠にどうも相濟みませぬわけで、へい。」と、乞食は座にえ堪へぬらしくもぢく／＼してゐる。

「いや、どう致しまして。して御用は――。」と、團平は賓客に對する禮を崩さなかつた。

義太夫
義太夫節のこと。
元祿の頃大阪の義
太夫の創めた浄瑠
璃節。

恥ぢる

「實はその突然の儀にございますが、私は至つて義太夫の三味線を伺ふのが好きでございまして、しかしまだその、何でございます、お師匠様のを伺つたことがございませぬので、それをば一生の願とはして居りまして、御覽のやうな、はや見る影もない態さまで、何ともどうも——。」と、きれく、の言葉に境遇を恥ぢる素振は現れて居るが、その熱心の態度は眼の輝きにも知られて、さすが古今の名人の心を動かすに十分であつた。

「さうですか、それはまあよろしい、弾きませう。どうぞゆつくり聽いて下さい。おい、お茶とお菓子、それからお煙草盆はどうした。いや、どうも失禮な奴ば

浪花

今の大坂。

志度寺のお辻の最期

「花の上野譽の石碑」の一段。この浄瑠璃は田宮坊太郎の仇討を脚色したものである。

かりで。」と、團平は次の間に立つて、三味線を抱へて來た。「誠にはや有難いこととございまして。」と乞食は感に堪へて居る。調律の撥音ばちおとにさへ、浪花の街の動搖は靜つて、秋の午下りは夜半のやうだ。弾き出したは、志度寺のお辻の最期。」その水際立つた絃の音には、富貴もなく、貧賤もなく、人もなく、我もなく、三味線もなく、撥もなく、唯鳴りに鳴る玄妙の音ばかり。乞食の頬には涙が滂沱と傳はつた。

乞食は欣然として辭し去つて、行く處を知らなかつた。

それを飽かずく見送つた團平の眼には、うるみがあった。その名人の眼のうるみこそ、知己に遇つた歡喜と、二度と會はれぬ別離の悲しみを語るものであつた。やがて室に歸つた團平は、藝人の妻としての不心得を責めて、離縁を申し渡したが、同輩門弟等の詫でやうやく納まつたといふことである。その名人今は天に歸つて、不思議の音締ねじめはもう耳にすることが出来ぬ。

あゝ、音樂の天才、天才の伎倆は人と共に亡びてしまふ。併し、この美はしい話は永久に生命を持つであらう。

(耳の趣味)

三板倉勝重

新井白石

新井白石
名は君美。儒者。
江戸の人。享保十
年(三六五)歿、年六
十九。
天正十六年
正親町天皇の御代
(三三六)。
板倉勝重
徳川家の重臣。三
河國(愛知縣)の
人。寛永元年(三二四)
歿、年八十三。
徳川殿
徳川家康
駿河の國府
静岡市。

天正十六年徳川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人の中を擇び給ひて、板倉勝重をしてこの町奉行に任せらる。

はじめ勝重を召され、この職のこと仰せ下されしが、その任に堪へざる由を固く辭し申しけれども、更にお許しなし。勝重さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ふものと謀りてこそ、御返事をば申すべけれ。」と申す。徳川殿笑はせ給ひて、「さもありません、罷り歸りて相謀れ。」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悦ぶべきことありと告げ

ほくそゑむ

知らず人あり。いかなる幸ひや候。」といひけるに、勝重
ものをもいはず、ほくそゑみて、衣裳ぬぎすてて座になほ
り、妻にうち向ひ、「されば、けふ召されしこと餘の儀にあら
ず。此の度御座所を移さるゝによつて、彼の町の奉行た
るべき由を仰せ下さる。いかにも叶ふべからざる旨を
辭し申せども、お許しなし。さらば我が家に歸り、妻に謀
り候はんと申して罷り歸りぬ。さておことはいかにや
思ふ。」といふ。妻は大いに驚きて、「あなあさまし。私事
などならば、夫婦謀るといふこともこそあれ。公にてか
かることやのたまふべき。ましてこれは仰せ下さるゝ
ところなり。殊にその職に堪へん堪へじは御心にこそ

あるべけれ。みづからいかで知り候ふべき。」といへば、
勝重「いや、我この職に堪へん堪へじは、我が心一つの
みにあらず。御身の心によることにて侍るぞ。まづ心
を鎮めてよく聽き給へ。古より今に至り、異國にも本朝
にも、奉行・頭人などといはるゝ者の、その身を失ひ、その家
を亡さぬは稀なり。或は内縁について訴を斷ること公
ならず。或は賄賂に因りて、理をわかつこと私多し。こ
れ等の禍は婦人より起るところあり。我若しこの職承
らん後は、親しき人の言ひ寄らんことなりとも、訴訟のこ
と執り給ふまじきか。僅かの贈物參らせて候ふことあ
りとも、苞苴のもの受け給ふまじきか。これ等のことを

初として、おことは勝重の身の上、いかなる不思議のことありとも、差出でてものたまふまじき由固く誓ひ給はざらんには、勝重この職に任ずることは、いかにも叶ふべからず。さればこそ、御身と謀るべしとは申したれ。」といふ。妻つくづくとうち聴きて、誠にたまふところ理にこそ侍れ。みづからはいかなる誓をも立てなん。とく参りて、畏まらせ給へ。」といふ。勝重大いに悦びて、神にかけ、佛にかけて、堅き誓たてさせて、「此の上は思ひ置くことなし。さらば参らん。」とて、衣裳ひきつくるひて出づ。袴の後腰をもぢりて着たり。妻うしろざまに見て、「袴のうしろ悪しう候。」というて、立寄りてなほさんとす。

もぢる

勝重聞きもあへず、「さればこそ、わが妻に謀らんと申ししは過たざりけれ。勝重が身の上のこと、いかなる不思議ありとも、差出でてものいはじと誓ひしは、今のほどぞかし。早くも忘れ給へりな。この定ならんには、勝重職うけたまはること叶ふべからず。」とて、また衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さまぐの怠状まるらす。「さらばその言葉、いつまでも忘れ給ふな。」といひて、御前に参る。徳川殿いかに。汝が妻は何とかいひし。」と仰せければ、妻にて候ふものが、慎みてうけたまはれと申し侍る。」と申す。「さこそあらめ。」とて、大いに笑はせ給ひしとなり。

(藩翰譜)

佐々醒雪
名は政一。文學博士。國文學者。京都市の人。大正六年歿。年四十六。

加賀
今の石川縣。

千代

江戸時代の女流俳人。安永四年(一八〇三)歿。年七十四。

額田の女王

萬葉集の女流歌人。

小野小町

平安朝初期の女流歌人。

紫式部

二十八頁頭註参照。

和泉式部

平安朝に於ける女流歌人。

芭蕉

姓は松尾、名は宗房。俳人。伊賀國(三重縣)の人。元祿七年(一六九〇)歿。年五十一。

一三 加賀の千代女

佐々醒雪

敷島の道には古來多くの女流名家が出てゐる。額田ぬかたの女王おほぎみ・小野小町・紫式部・和泉式部等、數へ立てれば際限のない程である。けれども俳句界に於ては、未ださまで多くの才媛が出て居らぬ。芭蕉翁以來の名人は多く男子である。唯女流俳人を代表し、今日も世にもて囃されて居るのは、加賀の千代女である。

千代女は今から二百餘年前、加賀國松任まつたふといふ在方に生まれた。父は福増屋六兵衛といつて、表具師を業として居た。家はあまり裕かでは無いが、表具師の事である

から、自ら風流の事にも通じてゐた。千代女はかゝる家に生まれ、かゝる父を持つた事として、幼いながらも風雅の道に志し、殊に十七字の俳句を好んで、小さい頭をひねつては春花・秋月などを詠じて居た。其の頃は俳句の盛んな時代で、全國何れの地に於ても流行を極めて居り、又有名な宗匠も少くなかつたが、松任のやうな田舎には、到底良宗匠のある筈が無い。六兵衛も千代女も深くこれを残念に思つて、折もあらば良師を得て學びたいものと心掛けて居つた。

すると或時、名高い宗匠が行脚の折から、圖らずも松任に來て泊ることになつた。それは盧元坊といふ俳諧師

盧元坊
姓は仙石。江戸時代の俳人。延享四年(一八〇七)歿。年五十六。

である。六兵衛は盧元坊の評判をかねてより聞いて居たので、早速その事を娘の千代女に知らせる。千代女は飛び立つばかりに喜び、盧元坊の宿を訪ねて、丁寧ていねいに教を乞うたのである。

盧元坊は此の日、長道中をしたので、大分疲勞して居たものの、千代女の熱心に無愛相も出來ず、承諾の旨を答へて、時節に因んで時鳥の題を出して、「二句作つて見よ。」と言つた。千代女は早速作つて一句を示すと、「それはいかぬ、もう一句。」と言ふ。又一句考へて差出したが、それも駄句だと取上げられぬ。千代女は一所懸命に句作に耽つたが、妙想が浮かんで來ぬ。益、苦吟してゐる中に、夜

も段々と更けて來た。盧元坊は晝の疲に堪へぬのか、うとうとと眠り始めた。千代女は驚きもし、悔しくも思つたが、それも一寸の間のこと、愈、思ひを凝らして句作に熱中して居つた。

鶏の聲が彼方此方に聞え初めて、東の空から白んで來た。やがて雀も埒を出でて、軒端に餌をあさる頃となつた。熟睡して居た盧元坊が、不圖眼を覺まして見ると、蚊帳の外には、昨夜來た千代女が未だ坐つた儘である。さすがに驚いて、「お前はあのまゝ寢ずに居たのか。」と聲をかけた。千代女は其の時、丁度句案成つて、
ほとゝぎすくゝとて明けにけり

と見事に一句を詠んだ。坊はつくづく口ずさんで見て、「いや是は實に名吟だ。」と始めて其の句をほめ、昨夜よりの無禮を謝し永くこの心持を忘れず勉強するやうにと言つて、懇に句作上の工夫を示した。

その後、千代女は、盧元坊の師匠なる東花坊、又は乙由などにも就いて學び、益其の俳名を高めた。十八歳の時、良縁あつて他へ嫁いだ。まめしく働いて夫、舅姑に事へ、よく其の家を治めたが、其の間にも尙俳句を忘れず、時時金玉の名吟を出しては世間を驚かした。嘗てその愛兒を失つた時、左の一句を詠じた。

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら

東花坊

各務支考の號。蕉門十哲の一人。江戸時代の俳人。享保十六年(三元)歿、年六十七。

乙由

姓は中川。江戸時代の俳人。

既に小さい樞は送つたのであるが、かはいらしい姿は髣髴としてなほ眼底にある。涙の泉も涸れはてて、唯うつとりと去來する蜻蛉を見つめてゐると、何時しか、我が兒は遊びにふけて、家路を忘れたのではないかとさへ思ひ惑ふのが、實に母親の至情であらう。吟ずれば吟ずる程、悲しとも戀しともいはない所に、却つて切なる悲しみが察せられる。

千代女は又夙く其の夫を失ひ、ためにその家の絶えんことを慮つて養子に家を嗣がせた。今は心安しと、惜しげもなく黒髪を剃り落して、名を素園と改め、只管風雅の道を樂しみ、安永四年七十四歳で安らかに往生を遂げた。

安永四年
後桃園天皇の御代
(一四三三)。

河井醉茗
名は又平。詩人。
堺市の人。明治七
年生。

一四 明るい顔

河井 醉茗

なんといふ明るい顔
その顔があらはれると
まはりが明るくなる。
クリーム色の薔薇一輪
新しく挿しかへたよりも
室の中があかるくなる。
その顔には
ひろびろとした野原のやうな輝きと

まともに向ふ力と
いつも咲いたばかりの花のやうな
香氣とがある。
くもりのない
陰翳かげりのない
たくみのない
偽のない
ありのままの心が
ありのままに表れて
夢も幻も見えない顔。

誰にでも呼びかける顔
 凡てに肯いてゐる顔。
 その顔があらはれると
 人達がいきいきと淨くなり
 どんな世の中にも
 頼みになる人が居るやうで
 心が明るい方に反射し
 誰の顔も明るくなる。

(紫羅欄花)

黒田米子
 女流登山家。東京
 市の人。明治三十
 四年生。

一五 スキー禮讚

黒田米子

夢の中で、空中に舞ひあがる心持。或時は、ふうはりと
 軽く身が浮いて、すうつくと、雲海を歩くこともあり、鮎
 のやうにピチくと、泳ぎ泳いで雲中にもがく時もあり
 ……などと、空飛ぶ夢を見る人に、私はスキーの快はそれ、
 と申し上げる。

意識下の願望が、夢に現れてくるといふを聽けば、飛行
 の術をもたぬ人間に、舞ひあがり、飛びまはりたい願望が
 あればこそ夢もあるのだらうと思ひます。少くとも私
 自身は、私の空想に、幻想を織りまぜて——飛行機などで



(原 高 賀 志) - キ

なく、自分で飛べたらいいなあ
——と希つてゐたものです。
その、憧れ心、その空想が、偶然
に、白雪の天地にスキーするわ
ざを識つて、むしろ愉ばさ
れたのです。

雪と云ふものは、人の心に不
思議な魅力をもつ怪しき存在、
何かしらぬが、雪を見てゐると
たのしくなつて、童心が甦り、を

どけ心がピチ／＼踊る……といふのは、私ばかりではな
いでせう。

サラ／＼サ、ラ、サラ／＼サ、ラ、細かな／＼粉雪
が、窓の灯影のうちを落ちてゆく姿、軽いリズム、それを机
に倚つて見てゐるとき、生から死への道を如實に示す相
と想ひながらも、その翌朝の朝日に溶けるまでの、須臾の
命さへ楽しさうに、雪の小人が踊つてゐる、飄逸な事よ、と
感じるものです。

人間の知らない、明るい軽い楽しみを、たのしんでゐる
やうな、雪片のをどりよ。そのはかない生命にも、一點の
翳のない喜びが満ちてゐるのなら、どんなに羨しい、貴い

心境なのか！

まして、雪積む山に来て、いま、こゝに、この世に、新しくひ
らかれた心地する別天地に立つさへ心をどるものを、自
ら雪山のひとときに描いて滑る、スキーする心は、譬へる
ものなく、晴がましい、感激あふれたもの。

雪の山、それは端山のあひだから、頭をのぞく僅かの姿
できへ、限りなく人の心を惹くものです。雪積む峠の彼
方の空に、どんなものがひそんでゐようか。カアルプッセ
の、

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ

カアルプッセ
ドイツの詩人（西
紀一五二―一九二〇）

噫、われひとと尋めゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人のいふ。

（上田 敏譯）

有名なこの詩の山も、頂きに雪が光つてゐたらうと想へ
るのです。雪の山は、はるかなるく、想ひのうちに誘ふ
もの、……そして期待と、希望とを、人の胸に、さゝやかなが
ら力強く、ほそくと根ぶかく、絶えさせぬもの。
眺めるばかりでも、魂を吸ひつけられてゐた雪の山、そ
のなかへ自ら入り、踏むに惜しい朝の新雪へ、すかりく、
スキーの痕つけてゆく、傷ましいほどの、勿體ないほどの、

クリスマスツリー

自分の振舞ひ、私のスキーの歡喜は、あらゆるものに満ち

てゐます。

クリスマスツリーを無數に植

新ゑつけたやうな、梅樅檜の大樹の

新雪に、日の光が射しこんでくる

とき、その下道は、何と心樂しく浮

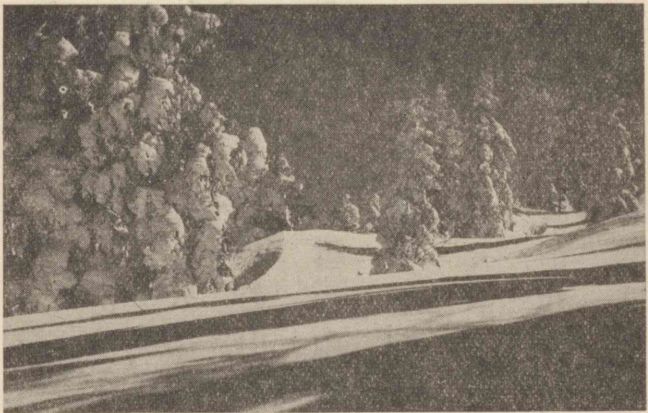
きたち、親しみぶかい想ひがある

(原か、しかも神祕感と、清淨感のつよ

い、雪をいたゞく樹の姿、流石これ

をクリスマス祝宴にえらんだ

心を同感しながら、私はどこまでも、森をゆきます。



木もない高山の、雪と氷と巖への憧れ、それは喋々する
を超えた、尊嚴な、崇高な、この世ながらの白光界。その絶
大な神祕の扉を、われ〜に開いてくれたのも亦、スキー
のたまもの、スキーの導きにほかありません。

思へば思ふほど、スキー禮讚！ 私はひたぶるにかう

叫ばずには居られません。

(雪—女性とスキー)

山嶽

雪
山
嶽
本

一六 春夏秋冬

若山 牧水

若山牧水
名は繁。歌人。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十四。

うす紅べにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり
山櫻花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる
山ざくら花

岩かげに立ちてわが釣る淵のうへに櫻ひまなく散り
てをるなり

峯かけてきほひ茂れる杉山のふもとの原の山ざくら
花

川田 順

歌人。東京市の人。
明治十五年生。

川 田 順

日はひねもす照りつけらるる草山の夏なつ深草ふかくさは夜も乾
けり

散りこぼれ日を経し冬ふゆ青あおの花の上に今日ちりたるが
眞白くは見ゆ

星のある夜空ふけたりわが船の大き帆柱の揺れの眞
上に

船の舳に二十日あまりの月ほそく出でぬるやがてし
らみけるかな

窪田空穂
名は通治。歌人。
早稻田大學教授。
長野縣の人。明治
十年生。

窪田空穂

吹く風の今宵すずしく讀みさしの机の上の書ひるが
へす

天地は清らに澄みて掌たなぞてに載せてわが見る珠の如きか
も

その種の飛ぶおもしろみ爪紅つまぐれの莢つぶしをるや童心わらべごころ
に

松の葉の細葉がくりに松かさの青きが見えて秋さり
にけり

木下利玄

木下利玄
歌人。岡山縣の
人。大正十四年歿、
年四十。

庭見れば土にしみ入りしみ入りて冷え冷え雨の降り
いでしかな

雨傘をひらけば音あり冬めきし時雨の中に朝戸出あさとす
るも

車 日の出頃街道の霜まつしるにからからつづく百姓の

奥田正造
東京成蹊高等女學
校校長。岐阜縣の
人。明治十七年生。

奕堂和尚

梅崖。禪僧。晩年
曹洞宗の管長とな
つた。明治十二年
歿。

一七 鐘の音

奥田正造

一日、奕堂和尚は殷々と響く曉鐘に心耳を澄まし、禪定からたつて侍僧を召し、鐘撞くものが誰であるかを見させた。侍僧はそれが新參の一小沙彌であることを返り報じた。そこで奕堂和尚はこれを膝下に招いて、

「今曉の鐘はいかなる心持で撞いたか。」

とたづねられた。沙彌は

「別にこれといふ心持もなく、たゞ鐘を撞いたばかりでございます。」

と答へたので、

沙彌
初心の僧。小僧。

「いや、さうではあるまい。何か心に思うてゐたであらう。鐘撞かばかくこそ。まことに貴い響であつたぞ。」

といはれて、侍僧は「別にこれといふ心得もございませんが、たゞ國許の師匠が鐘撞かば鐘を佛と心得て、それに添ふだけの心の慎みを忘れてはならぬと、常々戒めて下されたことを思ひ浮かべて、鐘を佛と敬ひ、禮拜しつゝ撞いたばかりでございます。」

と答へた。奕堂和尚はしみじみとその心掛を賞し、

森田悟由
號は大休。禪僧。
明治二十四年曹洞
宗管長となつた。
大正四年歿、年八
十二。

通天
大徳寺の俗稱。臨
濟宗大徳寺派の本
山。京都府愛宕郡
にある。

鼎洲
禪僧。大徳寺の和
尚。嘉永二年(一三
〇五)歿、年七十六。

と戒められた。この小沙彌こそは、後年の森田悟由大禪師である。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさへ、かほどまで敬虔の念をこめた古人の心づかひは、いかにも貴い。

通天の鼎洲和尚が、或日山門内で松の落葉を一つ／＼手で拾つて居られた。これを見た侍者某が、「お手づから一つ／＼お拾ひになるにも及びませぬ。どうせたと今掃きます故。」と聲をかけた。鼎洲はつく／＼と侍者の顔を見て、「今の言葉は修行する人の心持ではあるまい。どうせなどと後をあてにするやうではいかぬ。一つ拾

へば一つだけ綺麗になるのぢや。」と戒められた。掃除、いひかへれば清浄は實にこの心でなければならぬ。はうきを持つた時にのみ掃除があるのではない。一塵の心にとまつた時、その一塵を取除けて、常に清浄にするところ、心頭の掃除がある。

雲門大師が門前で菜を洗つてゐた時、思はずその一葉を取流し、非常に驚いてこれを追ひかけ、千辛萬苦の末やうやう拾ひ上げた。これを見た庄屋某が、「菜の一葉くらゐにそれほどまで苦勞なさるのは、どういふわけでございますか。」

雲門大師
支那韶州雲門山に
居つた禪宗の高
祖。

とたづねた。大師は
 「一莖の大なるも、一葉の小なるも、均しくこれ天與であつて、人を養はんが爲のものである。小なればと棄てて顧みないのは、天恩を忘れ、人道に背く所以ではないか。百粒の米は一粒より生じ、一滴の水はよく長江の大をなす。」

と教へられた。この大精神に取りあつかはれる一粒一葉こそ、眞に道を修める人の生命を養ふに足りる尊い心身の糧といふべきである。

(茶味)

島崎藤村

名は春樹。詩人。小説家。長野縣の人。明治五年生。

一八 文章の道

島崎藤村

一
 十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験の無かつた私も、やうやく岸を離れることができ、やうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通ううちに、向ふの河岸まで泳ぎこすことができた。更にまた一夏泳いでみたら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃には、よく解らなかつた水瀬の速い遅いも解つてきたし、眞水と潮流の混り合つた

あの川の中の冷たい温かいも解つてきたし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることもできた。板子無しには溺れるほかは無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。普通の泳ぎ手がゆけるところまでは自分も到り得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなかく、容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身のできる人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。

文章の道にも、たれにでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして「根氣」さへあれば、そこまでゆく

くことは決して難く無いに相違ない。

二

小 諸

長野縣北佐久郡小諸町

慢一漫

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。だれでも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。たゞ當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んでいく。射手の心にも頼むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は、高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が私

たちの矢場へ来た。その老人が、先づ姿勢を正すことを私たちに教へてくれた。それから私たちの矢は、たとひ的を貫くことができないうやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所をいくやうになつた。

これは文章の道にも當て嵌めてみる事ができる。たゞ好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

三

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鋤をかついでいつて土を耕してみた。私は、先づ荒れた畠の地面を掘り起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や、じやがいもの芽のやうな植ゑ易いものから作つてみた。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑてみた。草を取りにゆき、肥料をかけた。じやがいもの花が白くさかりな頃にいつて、試みに土の中を探つてみると、はや圓いのが幾つも、根もとの方から出て来た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡

みついた。畠の中には、なつた嫩い實を摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、ほんたうの農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でも能く思ひ出すことができる。

われ／＼が文章の手本とすべきものが、何程われ／＼の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みな

ければならない。「試みる」といふことは「悟る」といふことの初である。

四

浅草橋
隅田川にそゞぐ神田川の下流に架した橋。
兩國橋
隅田川に架した、日本橋區から本所區へ通じる橋。

浅草の新片町に住んだ頃、家は浅草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界限を漕ぎ廻つたことがある。最初のうちは、むやみに手足を動かし、あの長さ一丈ほどもある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つてみた。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押しすることができるようになつた。向ふから大きな傳馬が

やつてきたぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いでゆく楽しみなどもそれから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには、「力の省略」がある、「簡素の美」がある。文章の道にも、むやみに筆を弄することが決して自己の眞の表白とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶の力」がある。

(飯倉だより)

佐佐木信綱

文學博士。歌人。三重縣の人。明治五年生。

本居宣長

國學四大人の一。鈴の屋と號す。伊勢松阪の人。享和元年(一八一六)歿、年七十二。

寶永二年

東山天皇の御代。

享保十三年

中御門天皇の御代。

元文五年

櫻町天皇の御代。

明和五年

後櫻町天皇の御代。

大傳馬町

今の東京市日本橋區にある。

一九 本居宣長の母

佐佐木 信綱

本居宣長の母勝子は、寶永二年四月十四日、伊勢松阪新町の村田孫兵衛豐商の四女として生まれ、享保十三年二十四歳で小津三四右衛門定利の妻となつて、二男二女を生んだ。其の長男が宣長である。元文五年三十六歳の時に夫に後れ、明和五年正月朔日、六十四歳で世を去つた。小津家は松阪の舊家で、江戸に出て、木綿問屋を営んでゐた。宣長の曾祖父、祖父相繼いで、商業が大いに榮え、父三四右衛門これをうけついで熱心に業務に従つたが、手代の爲に誤られて資産を失ひ、四十六歳の七月江戸大傳

馬町の店で歿した。三四右衛門の死は、言ふまでもなく小津家即ち本居家にとつて大災厄であつた。養嗣子定治は江戸にあつたが、それもまた数年の後世を去つた。遺産として残つたものは四百兩ばかりあるだけであつたが、それも親戚に保管され、其の利子として僅かの金が給されるだけであつた。この間に立つて一家の生計を維持すると共に、宣長を始め子女の教育を全うしなければならなかつた。尋常の婦人ならば、殆どせんすべをも知らないで、茫然自失すべき窮境であつたのである。所が勝子は、この間に處して少しも狼狽せず、十分な思慮と明敏な判断とを以て雄々しくも一家の經營に當つた。

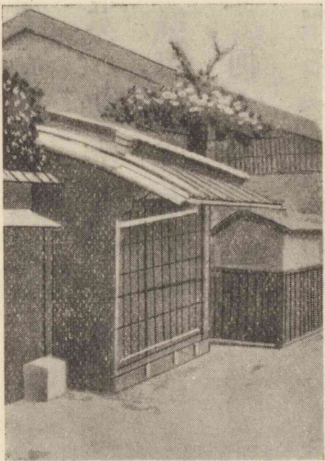
こゝに特筆すべきは、勝子がその子宣長に對する明察と事宜を得た其の教育の態度とである。實に勝子の賢明は、よく本居一家の危急を救ひ得たばかりでなく、更にまた本居宣長といふ一大學者を生ぜしめて、日本の國家及び學界に未曾有の寄與をなさしめたのである。賢母の功績亦大なりといふべきである。

何をか勝子の明察といふ。曰く、彼が宣長の到底商人たるべきものでないといふことを見ぬいて、彼をして學者たらしめ、以てその天分を全うせしめようとし、しかも純然たる學者の生活の困難なるを見て、生活の資を得べく醫師たらしめようとしたことである。よくその子を

寶曆二年
桃園天皇の御代。

堀景山
儒者。安藝侯に仕
へ専ら京都に住
す。寶曆七年(西二
七)歿、年六十九。

見抜いたと共に、また生計の點にも十分に心を用ひた勝子の先見と思慮を盡くした態度とは、眞に常人の及び難いことではないか。已にこの方針を立てた。即ち寶曆



宣長の舊宅

二年、宣長が二十三歳の春、京師へ留學にやることにした。宣長は京都に上つて、まづ堀景山に儒學を學び、後武林幸順に醫を學び、五年四箇月間留つた。この五年餘の留學が、やがて宣長が學問の上にも、また生活の爲にも基礎となつて、宣長をして後年の宣長たらしめたことは、宣長の傳に於ける明白な事實で

ある。宣長をしてこの五年間餘、何等後顧の憂ひなく、又都會生活のあまたの誘惑にも陥らずに、十分勉學するを得しめたのは、まつたく勝子の苦心と激勵との結果であつた。此の間困苦の中から、宣長を留學に出して、一家の經濟を處理し、又學費をおくる勝子の苦心は決して一通りでなかつた。彼は或は家財を賣り、或は親戚から借錢をなし、苦心慘澹して之を處理した。しかも彼の女は其の子に對して、例へば會ひたい情をも抑へて歸郷を延させようとしたやうにもとより節約を要求こそはしたれ、必要の費用に對しては常に事を缺かさせず、決して愚痴がましいことを言はなかつた。しかし、自分の苦心は或

程度まで打明けて之を誡めた。さうして、宣長が日常生活につき、又勉學については絶えず啓發し、又宣長の雙肩に懸つてゐる家運挽回の大責任についてこれを激勵することゝを忘れなかつた。勝子が宣長に與へた書翰の一つに、

「扱々何かと心づけ候へども、入用多く苦勞致し申し候。随分々々無事にて心づよく思ひ、外の義に心移し申さずたゞ一筋に醫者の方心がけ、申すまでは無く候へども、人間心一筋を強く、道々を專一になさるべく候。此の所そもじ取りそこなひ取りはづし申され候と、いつも申す通り、一人の母此の世より迷ひ申し候。

其の上、父母先祖の跡の所よく、心にしめ、專一に守り申さるべく候。人々そもじ事ほめ申し居り候へば此の所取りそこなひ候へば、親の恥申す様はなく、大不孝と存じ候。

とあるが如きは、最も敬重すべき文字である。而して、勝子が當時のやうな賢慮と苦心と激勵と誠意とは、もとより俊秀の子である宣長に感應せずにはあるなかつたに相違ない。當時勝子から贈つた書翰は、前に述べた如く數十通も残つてゐるが、宣長から答へたものは遺憾ながら殆ど傳はつてをらぬ。随つて勝子の心づくしが如何に宣長の心に反應したかはこれを知り得ない

が、しかし、其の反應の効果を明瞭に吾人に語る大なる事實がある。それは宣長の學者としての成功である。宣長をしてかやうな國學上の偉人とならせた素因は、多くこれを母堂勝子の人格に求めるべきである。宣長の學問と事業とを嘆美するにつけても、吾人は必ず勝子の賢明を忘れてはならぬ。我が國に、凡ての方面に涉つて最も必要とするところは大人物である。さうして大人物を生ぜさせるには國民の母が賢明であらねばならぬ。吾人は今に於てわが勝子刀自を偲ぶ情が、殊に切ならざるを得ない。

(賀茂貞淵と本居宣長)

芳賀矢一

文學博士。國文學者。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

二〇 我が國の家庭

芳賀 矢一

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて路端に遊んでゐるのは、我が國ではどこへ行つても見受ける事であるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が、「何といふかはいらしい様子であらう。こゝに日本の美しい國風が見える。」と言つて、感心したさうである。すなほに親の言ひ付けを守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹をかはいがつて世話するのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切にするのも、日本の家庭の特色

すなほ。

くはし



我が國の家庭は、この西洋人は、くはしくは我が國の家庭の内部を知らなかつたのであらうが、路端の子供を見て、我が國の家庭の美德「父母ニ孝」「兄弟ニ友」の一端を認め得たのである。父母の子を愛する情は東西共に變りはないが、日本の家庭では殊に子供を大切に

にする。家の貧富貴賤によつて、生活の上には夫々の差別があつても、一體の風習は子供を大切にする。子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生まれた時の父母の心は、家の後繼が出来たのを喜び、家の益繁昌して行くのを祝ふのである。親族も朋友もみな同じ心で祝賀するのである。七夜までの中に名を附ける。「行末は立派な人になつて御國の爲にもなれ。」と、祖先の名に因んだり、めでたい語などを選んだりして命名する。三十二・三日目には産土神にお宮參をして、誕生したことをお知らせする。三つ、五つ、七つとだん／＼成長すれば、七五三の祝といつて、その年々の十一月に參

詣する風習もある。男の子の袴着の祝、女の子の帯の祝、父母は只管その子の成長を楽しむのである。三月三日の雛祭は女の子の節供、五月五日の端午は男の子の節供、一家中の歡喜は子供等の爲に傾けられる。美しい雛人形、勇ましい鯉幟、かういふ楽しい日は年々に繰り返されるのである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供等を喜ばせようと苦心し、親類知友からも、お子様へと心をこめた品物を贈る。我が國の都市程、おもちゃ屋の多い所はないといふのも、小さい國民をかはいがる國風の盛んなことを證明するのである。我が國の家庭には、お父さんも、お母さんも、お祖父さんも、お祖母さんもいらつしやる。

日本の子供は父母の慈愛の外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は孫をいくしんで老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌が祀つてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んで居つて、だん／＼と子孫に傳はつて行くのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さういふものないところもあるが、本家にさかのぼり、源を正せば皆それがある。家には家の紋もある。父母は我が家の神、我が神と心盡くしていつけ人の子

と、本居宣長大人は歌はれた。父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神と崇めるのが、我が國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しい懐かしい親愛の情に、貴い有難い敬愛の情が湧いて、父母に對しては神に對する様な虔^ましやかな心持になるのである。それ故、言語動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では、親子夫婦兄弟姉妹の間の言葉遣ひはすべて對等であるが、「家の神」と仕へ奉る父母に對しての言語は、固より別でなければならぬ。先祖と同居して居る我が國の家庭では、目上に對する言語と目下に對する言語に明らかな差別がある。親代りに世話をし、いたはつて下さる

兄弟に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄弟はあくまで幼少な弟妹を憐み、弟妹はどこまでも兄弟を目上の人と崇め、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、此に美しい家庭が成り立つのである。「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ」の家庭が存立するのである。西洋人は「日本は子供の樂園である。」と、言つて居る。「日本は子供をか、はいがる國である。」と、西洋の讀本にも書いてある。我等がこの國に生まれたのは、我等の幸である。

(改訂女子新國文)

落合直文
國文學者。仙臺の
人。明治三十六年
歿、年四十三。

二一 この正月

落合直文

年もはや暮れんとす。病院の寢臺にうち臥して、つぐ
づくと過去の正月を追想するに、大かた皆忘れにたれど、



落合直文

幼時の事どものみは、よく記憶
せり。幼時は思想單純なり。
故に一たび頭腦に刻みたるこ
とは、生涯忘るゝこと能はざる
にやあらん。

或年の正月、父君より賜りたる紙鳶は、牛若丸と辨慶と
の繪なりしよ。或正月、母君の得させ給ひし雙六は、振出

躑躅岡
仙臺市の東部にあ
る丘。今は公園に
なつてゐる。

しが曾我兄弟にて、上りが神功皇后と武内宿禰との繪な
りしよ。この紙鳶この雙六は、最もわが氣に入りしもの
と見えて、牛若丸・辨慶の面影はさらなり、雙六の繪も大か
た記憶せり。その紙鳶を揚げたる日は風強かりしが、隣
の栗の木に引きかけしこと、又その雙六にて取りえたる
菓子は何なる菓子なりしか、その數は幾つなりしか、一
一記憶するもをかしや。
七歳の頃と覚えたり。書きぞめに「南山壽」といふ三字
を書きて、父君より「上和下睦」といふうるはしき墨を賜り
たることあり。その日、父君の御ゆるしを得て、兄君とと
もに躑躅岡なる天満宮に參詣せしが、その折のわが刀、脇

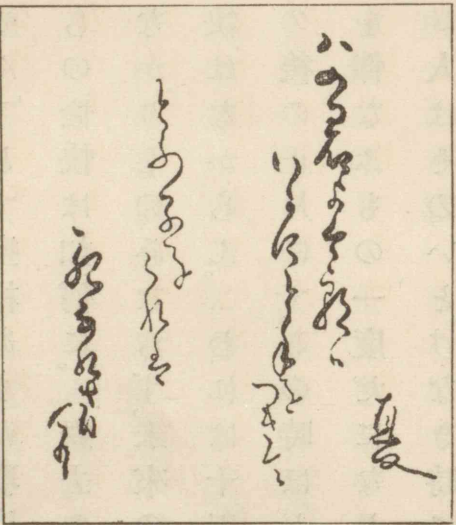
差よ、ふちがしらは唐獅子と牡丹とを彫刻せるもの、鐸はつやめきたる黒き地金に、七曜の星をちりばめたるもの、下緒は紫色にて平打なりしことまで記憶せり。その折、母君の着せ給ひし着物の紋も記憶すれば、袴の色も記憶せり。伴せしは、小姓の鐵之助、忠兵衛の二人と、仲間の彌助となり。石のきざはしを登る折は、彌助に負はれ、繪馬堂を巡る折は、忠兵衛に手を引かれたることも記憶せり。家に歸りて、着物は着替へたれど、刀脇差は放たず、その日一日差し居りしことも記憶せり。その頃のわれらの心の如何に無邪氣なりしよ。思ひ出づる毎に、今一度さる幼時に立返らまほしう覺ゆるや。

わが幼時は殊に愉快なりしなり。思ひ出づることは悉く愉快なりしことにて、苦痛といふほどの苦痛は更に記憶せざるなり。その當時、わが家の勢は如何にといふに、極めて零落せる時なり。伊達家の門閥にて、きらびやかなる生活をなし居りたるものが、維新の激變に會ひ、家祿は召上げられ、家格は落され、何もたよるところなきに、家は大きなり、家來は多し、このほどのわが家の慘狀、父君、母君の苦心、あとにて聞き知りぬ。さる家運衰退の折なるに拘らず、苦痛といふほどの苦痛は覺えず、かく愉快なる事のみ記憶し居るは、父君、母君の温かき情ならずして抑、何ぞや。

殊にわれらの最もよく記憶して忘るゝこと能はざるは、このほどのある正月、父君の病床におはせし時のことなり。前の年の霜月頃より病みつき給ひて、師走の末つ方によほど重くならせ給ひたれば、母君は「松飾もおろそかにせよ。屠蘇もやめね。餅も少く搗げ。」など宣へり。それを聞きゐたるわれらの失望は如何に。兄弟互に顔見あはせて、泣きぬべく覺えたり。さはいへ、元日には、父君の臥し給へる奥の間にて、雑煮など祝ひたるが、その折の父君の御顔よ、瘦せに瘦せ給ひて、髭なども恐しきまで伸びさせ給へり。母君に扶けられて、強ひて起きあがらせ給ひて、箸を執りは執られしが、一口も召し給はで、そのま

父君よ今朝はいかにと手をつきてとふ子を見れば死なれざりけり。

ままた枕に就かせ給へり。その日、廊下にてわれは兄君と獨樂を廻しゐたるに、母君出で來給ひて、「父君の御病氣



蹟筆の文直合落

なるに、心なきわざや」と止めさせ給ひぬ。やがて、下の座敷にて姉君と羽子つきゐたるに、母君また出で來給ひて、そも止めさせ給ひぬ。夜に入りて、雙六・歌留多などのこと頻りに

思ひ出でたれど、母君の許させ給はねば、取出さず。二日の朝、父君はわれらを呼び給へり。何事ぞと行き見れば、

「わが病氣ははや快くなれり。今日よりは獨樂も廻せ、羽子もつけ、雙六もせよ、歌留多も取れ。かけ物はわれ取らせん。」とて、蜜柑あまた取出させ給へり。その折のわれらの愉快は如何に。過去の正月にこの時ほどの愉快はなかりしのみならず、未來の正月にも亦この時ほどの愉快はなからん。われは十五歳の折東京に出でたるが、その後の正月にて、この時ほどに愉快を覺えしといふ記憶を伴ふもの一度だになし。

人はそのいとけなき時に、十分なる慈愛に育てられなば、その生涯を通じて、その情を肝に銘じて忘るゝことなかるべきなり。われも子を持てり。身貴き人のことは

小田原

神奈川県足柄下郡の海濱にある町。

逗子

神奈川県三浦郡の海濱にある町。

修善寺

静岡県田方郡の山中にある温泉町。

興津

静岡県庵原郡の海濱にある町。

知らず、家富める人のことは知らず、我等には我等の分あり。平生はとにかく、せめて正月ばかりも、彼等に愉快を與へんと思へり。かくてこの四五年は、病氣のため暖かき地に移りて正月を迎へたるが、いつも彼等を伴なひたり。一昨々年は小田原に、一昨年は逗子に、昨年は修善寺に、本年は興津に伴なひて、正月を迎へさせたり。雙六もすれば、歌留多も取れり。紙鳶も揚げたれば、羽子もつきたり。わが幼時の正月のことより考ふれば、彼等もその間にありて一二の記憶するものあらん。過去の正月は、彼等に對し、われはわが心に遺憾を覺えず。たゞこの正月よ、如何にして彼等に愉快を與ふべきか。今宵あたり、

彼等の母は、わが母君の宣ひしが如く、父君、病院におはすれば、松飾もおろそかにせん、屠蘇もやめん、餅も少く搗かん。などいひ居るならん。彼等はそのを聞きて、わが失望せし時の如く、必ずや失望し居るならん。わが父君は、よく我等の失望を愉快の地に替へさせ給へり。われは如何にしてか彼等の失望を慰むべき。思へば、この正月は、わが心一つにて、彼等が生涯忘るゝこと能はざる苦痛のものともなれば、又愉快のものともならん。はや餘日もなし。あはれ如何にせん。

(落合直文集)

三 祖先の祭祀

松平定信

人は父母に本づき、萬物は天地に本づきて生ずるものなり。先祖無くば、いかでか父母有らん。父母無くば、又



松平定信

いかでか此の身有らんや。さて、其の生ける時には事へて誠を盡くしあへざるが故に、祭祀の禮あり。

祭祀の禮は人道の本なり。

こゝに於て誠を盡くさざる時は、人道闕く。譬へば、父母先祖は木の根幹の如し。もろくの枝葉花實は伯叔父

松平定信
田安宗武の第七子。磐城國(福島縣)白河の城主松平定邦の嗣となる。幕府の老中。樂翁といふ。文政十二年(西元一八三〇年)七十二。

姑・兄弟・従兄弟、其の外の諸親類、子孫の如きものなり。其の木の根に培ひ、水そゞぎて、根本堅ければ、大風にも倒れず、炎暑にも枯れずして、枝葉花實時に従ひ茂り榮ゆるなり。

若し其の根のくつろぎ搖ぐにも、培はず、水そゞがずして捨て置くのみならず、あまつさへ其のほとりの土を掘りのけ、根をおし動かす時は、或は大風に吹き倒され、或は炎暑に枯るゝは必然の事なり。枝葉ばかり大切に、それには水そゞぎたりとも、其の根本枯れたるうへは、枝葉のみ榮ゆべき理無からん。人の父母・先祖に疎なるは、みづから木の根を搖がして倒すに異ならず。其の根枯る

みづから

榮え。

れば、かゞの枝葉も従ひて枯るゝは、皆人の知る所なり。されば、父母・先祖に厚くして、子孫の繁榮を祈るべきことなり。

さるに、父母・先祖に疎にして、頼むべき筋も無き佛神に媚びへつらひて、子孫の榮えんことを願ふは、道理無き事なり。これを譬へていはば、松の木の茂り榮えんことを求むとて、梅の木に培ひ、水そゞぐが如し。松の榮えんことを求めば、其の根に培ひ、水そゞぐに若かざらん。梅の榮えんことを願はば、其の根を養ふに若くこと無からん。これ實理にして、しるしあることなり。

但し、父母・先祖に厚くするは、全く子孫の繁榮を願ふの

みにはあらず。本に報ずる微意なり。先祖の神靈に事うまつるを計るに幾何も無し。幼にしては未だ事ふる道を盡くさず。稍成長しては力を盡くすことを知ると雖も、或は公務に暇無く、或は文武の學、又は親戚の交、他人の應對、職業の務等によりて、父母の膝下に在りて事ふることを得ざる日多し。たとひ生涯父母の膝下を離れずして事へたりとも、限りなき恩をば報い盡くすべきに非ず。父母既に身まかりて後は、悔いの八千度も甲斐なし。故に、歿後には其の神靈に事へて、在すが如く誠を盡くすは、已むことを得ざる至情を盡くすのみなり。子孫たるもの先祖に厚くば、先祖の神靈悦ばざらんや。さあらば、

驗 儉 險

祈らずとても子孫の繁榮疑ふべからず。父母存生の中に子孫を守らざる神靈有らんや。然るに、愚かなるものは父母祖先の神靈を粗末にして、願ふべき筋も無き神佛にても、靈驗あらたかなりといへば、此處の神に、彼處の佛に、多くの金銀を擲ち、我が身及び子孫の福を願ふは惑へるなりけり。其の金銀を以て民を救ひ、善事に用ふるは、祈らざる祈にして、自ら其の身及び子孫にも福有るべきことは必然の道理なり。「神は非禮を享けず。」といふに、非禮の祈禱に多くの金銀をつひやすは、惜しむべきことならずや。

(燈前漫筆)

今井邦子
歌人。徳島市の
人。明治二十三年
生。

二三 やさしい贈物

今井 邦子

秋も深くなつた頃でした。もの古りた大きな私の家の離れ二階には、西向きの障子に一杯夕日がさし、赤蜻蛉がいくつもくゞ来てとまつて居りました。私は足音をしのぼせて、蜻蛉を捕つて持つて居りました。やがて私はおやつがほしくなつて、母屋の方へおりてゆきました。すると母屋のほの暗い厨の板の間に祖母は坐りこんで、向ふ向きになつて一所懸命何かこしらへてゐる様子です。私はおはぎかおだんごでも出来るのかと思つて、いそいで祖母に近づいて見ますと、祖母はしきりに大きな

お握りをこしらへて居るのでした。

「どうしたの、誰にあげるの？」

私はあまりの不思議さに大きく目をみはりました。

祖母の答はかうでした。

祖母が用事に出た先から歸り道、町はづれの方から人品のいやしくない一人の女の人が、乳呑兒を背にして五つばかりの男の子の手を引き、とてもくゞ勞れたやうに歩いて來るので、何となくあはれに思つて様子を聞きますと、その女の人は大阪の者で、夫が何か仕事を見付けに東京へ出たきり五箇月も音沙汰ないので、大阪にも居られず、子供をつれて汽車にも乗らず歩いて東京へ出る途

中だといふのです。僅かのお金も使ひはたしてゐたらしく、食事もとつてゐないらしいので、氣の毒に思つて家まで連れて来て、食事をさせてやるところだといふのでした。私は子供心にも何かひどくあはれに思つて、その人たちを休ませてあると云ふ前庭の縁の方に行つてみました。そこに年の頃三十歳ぐらゐの女の人が、赤ん坊をおろしてさもく、勞れたやうに乳をのませて居り、そばに男の子が悲しさうに涙を流して居りました。身なりなど全く粗末でしたが、どこか正直さうなよい感じのする人でした。

そこへ祖母が大きなお握りを持つて出て来て、お茶を

添へてやりました。母親も子供も嬉しさうにそれを受けて、母親は涙をふきながらいく度もく、それをおしいたゞいて、子供と一緒に食べはじめました。

此の不思議な光景に、忽ち近所の小母さんたちがだんだん集つて来て、可愛さうな其の事情を聞くと、皆身につまされたやうに涙をながし、一番始に私の家の向ふの金松樓といふ料理店の女將が、銀貨を二つ紙に包んでさし出しました。又右隣の栗原といふ理髪店の小母さんは子供をおんぶして来てゐましたが、何思つたかすたくと家に歸つてゆくのです。好奇心の強い子供の私は、その小母さんの後をついて行つてみますと、小母さんは丁

度客のない斬髪床の大きな鏡の前を行つたり來たりしてゐましたが、こつそりお金を取出し、あはれなその女の手に贈りました。

外の三四人の人たちも、皆それ／＼に小さい財布を取出して女の人にくらかのお金を贈りました。女の方は身に沁みるやうに、それを一つ／＼押頂いて、長い旅によれ／＼になつた帯の中に入れました。私は子供心にも何かやりたくてならなかつたのですが、ふと思ひ出して、赤蜻蛉のなかでもお小姓蜻蛉と言つてとてもきれいな赤いとんぼを、絲で結へてその五つぐらゐになる男の子にやりました。男の子はひどく喜んで、そんな知らぬ

山里の村の人の家の庭さきに一とき休ませてもらつてゐる不安な旅とも知らぬやうに、とんぼをとばせて遊んでゐました。

女の方は食事をしてしまふと、そこらを器用に片付けて、まはりの人たちに丁寧におじぎをしてお禮の言葉を述べ、さて又乳呑兒をしつかりと背中に結ひつけ、子供の手をひいて信州からは五十五里さきの東京に向つて歩き出したのでした。

祖母をはじめ近所の小母さんたちは、立つてその女の人を見送つてゐました。男の子はとんぼを結ひつけた細い竹の棒を右手にもち、左手を母に引かれて行くので

したが、とんぼは高く舞ひながら行くのでした。
「ほんたうにねえ、ご亭主の方でも気が氣でないでせうが、やつぱりうまくかせぎがないのでせうねえ。無事に東京でめぐり會はればよいが。」

その不安はそこにゐた誰の心にもある不安でした。そしてつく／＼と、

「あゝ、夫が職をなくしたほど切ないことはありません。いねえ。」

と近所の鍛冶屋の小母さんは嘆息しました。此の人の家では、その頃小父さんがずつと病氣で床について居りました。此の小母さんは先程二錢をその女の人に贈つ

た人でした。

私たちはその後その女の人がどうなつたか、はたしてその夫にめぐり會つたかどうか知る由はありませんでした。しかし此の時のことはいつまでも心にのこつてゐて、折にふれては思ひ出し、今日でもあの女の人は無事に夫にめぐり會つたかしら、とそれを思ふたびに、あの勞れた人をたとへ一時でも町の婦女たちが集つて、慰めたり勵ましたりして、たとへ何ほどでも心からなる贈物をしたその日のことを思ひ出して、何か心の安けさ晴々しさを感ぜさせられます。いつか私は何かの本でオランダの田舎を旅行してゆ

くと、そこらの田舎家に老婆が立つてゐて、旅人をよび止め、しぼりたての牛乳をふるまつてくれる處をよんで、涙ぐましいまで、心をひかれたことがありました。日本でも萬葉集には、

橘のかげふむ道のやちまたに
 物ぞ思ふ妹にあはずして
 といふやうな歌があり、その時代の街路樹が橘の木であることを知りました。そしてそれは旅人の食料のいく分を助ける爲に、旅人の爲に特に果實のなる街路樹を選んで植ゑたものであることを學びまして、實に心を温ためられるやうに感じました。

橘の云々
 萬葉集、卷二、三
 方沙彌の歌。

家に云々
 萬葉集、卷二、有
 間皇子の御歌。

家にあれば筥にもる飯を草枕

旅にしあれば椎の葉にもる

とあるやうに、此の時代の旅は非常に困難をきはめたもので、よく旅人は飢ゑたり凍えたりして行きだふれたものでありました。それ故に、人間同志の同情から、かりそのめの街路樹も、必ず誰の爲といふ譯でなく、唯路ゆく旅人の爲に、果樹を植ゑ、その實をとるにまかせておいたといふこととございます。これは何といふ心のこもつたやさしい贈物でせう。

私の娘が女學校二年生の時、洲崎の水産試験所に見學があつて、冬の朝早く試験所の前に集ることになりました。

洲崎
 東京市深川區。



(劇) 修 禪 寺 物 語

たが、おくれて来る人を待ち合はせる間、埋立地に海から吹き来る朝風の寒さに、生徒たちはふるへてゐたさうです。すると近い處の町家のおかみさんが、かはいさうだと言つて焚火をしてくれたといふ話を娘が歸つて來ていたしました。私は人情の温かさに思はず涙ぐまさせられました。かうした贈物こそやさしい贈物ではありませんか。

岡本綺堂

名は敬二。劇作家。東京市の人。明治五年生。

頼家

源頼朝の子。元久元年(八四〇)歿、年二十三。

修禪寺

一名桂谷山寺。眞言宗。

二四夜又王

岡本綺堂

登場人物

面作師 夜又王

源左金吾頼家(二十三歳)

夜又王娘 桂

下田五郎景安(十七八歳)

同 楓

修禪寺の僧

元久元年七月十八日。

伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜又王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口に竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畑を隔てて塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾がすだれを下せり。庭前には秋草の花咲きたり。楓門に立ちて人を見送る體。そこに修善寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿後より下田五郎景安頼家の太刀を捧げて出づ。

僧 これく、將軍家の御おし微び行ぢや、疎忽があつてはなりませんぞ。

楓はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉 思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませんが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は縁に腰打掛く。

夜叉 して御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に残さんと、曩に其の方を召し出し、頼家に似せたる面おもてを作れと、繪姿までも遣しておいたるに、日を経れども出來せず、幾度か延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎 多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散ぢやぞ。

頼家 予は生まれ付いての性急ぢや。何時まで待てど暮
 せど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使な
 ど遣すこと無用と、予が直々に催促に参つた。おのれ
 何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ。仔細を申せ。
 夜叉 御立腹恐れ入りました。ござります。勿體なくも、征
 夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、
 身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて
 己に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打
 ちましても、意に適ふ程のもの一箇も無く、更に打替へ
 作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次
 第、何とぞお察し下さりませ。

頼家 えゝ、催促の都度に同じ事を――。其の申し譯は聞
 き飽いたぞ。

五郎 此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃
 までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫びを
 申せ。

夜叉 其の期日は申し上げられません。左に鑿を持ち右
 に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家
 を作り塔を組む番匠などとは事變りて、これは、生無
 き粗木あきを削り、男女・天人・夜叉羅刹ありとあらゆる善惡
 邪正の魂魄を打込む面作師。五體にみなぎる精力が
 兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝごとく彼に通

ひて、始めて面も作れます。たゞし、其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、われながら確とはわかりません。

僧 これ、夜又王殿。上様御自身も仰せらるゝ如く至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めの無い事申し上げたら、御疳癪が愈、募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからう。

夜又 ぢやというても出来ぬものはなう。僧 何の、こなたの腕で出来ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜又王といへば、京・鎌倉までも聞え

三島神社
伊豆國(靜岡縣)田
方郡三島町にある
官幣大社。

た者ぢやに――。

夜又 さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜又王といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に残すのは、如何にも無念ぢや。

頼家 何、無念ぢやと――。さらば如何なる祟を受けうとも早急には出来ぬといふか。

夜又 恐れながら早急には――。

頼家 むゝ、おのれ覺悟せい。

疳癪募りし頼家は、五郎の捧げた太刀引取つてあはや抜かんとす。奥より桂走り出で、

受けう(受けよう)

桂 まあくお待ち下さりませ。

頼家 え、退けく。

桂 先づお鎮り下さりませ。面は唯今献上いたします
る。なう父様。

と顧みれども夜又王は黙して答へず。

五郎 何、面は既に出來して居るか。

頼家 え、おのれ前後不揃のことを申し立てて、予をあざ
むかうでな。

桂 いえく、嘘偽ではござりません。面は確かに出來
して居ります。これ父様、もう此の上は是非がござ
んすまい。

楓 ほんに然うぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面
を、寧ろ献上なされては。

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も
惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるな
らば、早う上様に差上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢや
ぞ。

夜又 命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事
ではない。黙つておゐやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面
を持つて來て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早
う早う。

るられう(るられ
よう)

楓 あい〜。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言にて少しく解けたる體なり。

桂 嘘偽ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげて、

頼家 おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎 上様お顔に生き寫しぢや。

頼家 む〜。

と飽かず打ちまもる。僧はしたり顔に、

僧 さればこそいはぬ事か。それ程の物が出来してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜又王殿も氣の知れ

ぬ男ぢや。 はは〜。

夜又王、容を改めて、

夜又 何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致し方もござりません。

方々には其の面を何と御覽なされます。

頼家 さすがは夜又王、天晴のものぢや。頼家も満足したぞ。

夜又 天晴との御賞美は、憚りながらお鑑識^{めがね}違ひ。それは

夜又王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎 面が死んで居るとは――。

夜又 年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて幾度打直しても生きてる色なく、魂魄も無き死人の相——。それは世にある人の面ではござりません。死人の面でござりまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きたる人の面——。死人の相とは相見えぬがなう。

夜又 いや、どう見直しても生ある人ではござりません。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈怪異なんどの類——。

僧 あ、これ、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。

御意に適へば、それで重疊。有難くお禮を申されい。頼家 む、とにもかくにも此の面は頼家の意に適うた。持ち歸るぞ。

夜又 たつて御所望とござりますれば——。

頼家 お、所望ぢや。それ。

顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。桂箱を捧げて庭におり立つ。

僧 やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜又王 殿明日又逢ひませうぞ。

頼家 行きかゝりて物に躓く。

頼家 お、何時の間にか暗うなつた。

僧進み出でて桂に雪洞を渡す。桂、假面の箱を僧に渡し、雪洞を持つて案内す。夜又王はじつと思案の體なり。

楓 父様、お見送りを――。

夜又王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎 そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出で行く。夜又王起ち上つて霎時しほし默然として沈思しゐたりしが、やがてつかく、と縁に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下げ、あはや打碎かんとす。楓は驚き取縋りて、

楓 あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜又 切羽詰りて是非に及ばず、拙き細工を献上したは、悔

んでもかへらぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜又王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を貽さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜又王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓 さりとは短氣でござりませう。如何なる名人、上手でも、細工の出來、不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出來ようならば、それが即ち名人ではござりませんか。

夜又 むゝ。

楓 拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、こ

れから、愈、精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面
を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

と縋りて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢたり。

(修禪寺物語)

新制女子國語讀本 卷四終

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

- 【一】一丁七丈三上下
- 世丙並【一】中【二】丸主
- 【三】之久乏乘【四】乙九
- 乞也乳亂【一】了事【二】
- 二五五井【一】亡交京亭
- 亦【人】人仁仇今介仕他
- 付代令以仰伸伴任伊伏
- 伐休伯伴伺似位低住佐
- 何余佛作伸使來佳例侍
- 供依侮侯侵便係促俱俊
- 俗保俠信修俳俵倅併倉
- 個倍倒候借倫假偉偏倅
- 健側偶傍傑備催働傳債
- 傷傾僅像僚僞僧價儀億
- 儉價優【兀】元兄充兆兎
- 先光克兌免兒【入】入内
- 全兩【八】八公六共兵具
- 其典兼【口】册再【二】元
- 【三】冬冷涼准凌凍【兀】
- 凡【口】凶出【刀】刀刃分
- 切刊刑列初判別利到制
- 刷券刺刻則削前剛副剩
- 割創劇劍劑【力】力功加
- 劣助努効勅勇勉動勤務
- 勝勞募勢勤勳勵勸【五】
- 包【匕】匕北【二】區【十】
- 十千升午半卑卒卓協南
- 博【卜】占【口】印危却卵
- 卷即【一】厄厘厚原厥
- 【二】去參【又】及友反叔
- 取受【口】口古句叫召可
- 史右司各合吉同名后吏
- 吐向君吟否含呈吸吹告
- 咸周味呼命和咽哀品員
- 哲唐唯唱商問啓善喉喜
- 喪喫單嗣嘉器噴嚴囑
- 【口】囚四回因困固國圍
- 園圓圖團【土】土在地坂
- 均坊坑坪垂型埋域城執
- 培基堀堂堅堤堪報場塔
- 塗塵境墓塀增墨墮墮墮壇
- 壓壞壤【土】土壯壹壽【冬】
- 夏【夕】夕外多夜夢【天】
- 大天太夫央失奇奉奏契
- 奔奢奧奪獎奮【女】女奴
- 好如妃妊妥妙妨妹妻姉
- 始姑姓委姦姪姪姻姿威
- 娘娛娠媚婚婦婿媒嫁嫡
- 嫌孃【子】子字存孝季孤
- 孫學【宅】宅守安宏完宗
- 官定宜客宣室官害宴家
- 容宿寄密富寒察寢寢寢審
- 寫寬寶【寸】寸寺封射將
- 專尉尊尋對導【小】小少
- 尙【尤】就【尺】尺尼尾尿
- 局居屈屈屋展履履屬

常用漢字

【山】山岡岩岳岸峰島
峽崇崎崩【川】川州巡巢
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幻】幻幼幾【床】
床序底店府度座庫庭庶
康廉廓廢廣廳【延】延廷
建廻【弄】弄弊【弋】弋式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【形】形影影彰【役】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復徵徵德徹【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思急急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情感惜惠惡情惱想愁愉
意愚愛感慈態慕憐慢慎
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戶】
戶戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛採探
控推揚接提換握揮搥搦
援損搖搜摘携摩撫揮擊
操擔據擬擴攝【支】支
【支】收改攻放政故敍教
敏救敗敢散敬敵數數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】

斤斥斬新斷斯【方】方施
旋旅族旗【无】既【日】日
且旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆曇曜【目】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木末末本
札朱机朽杉材村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔查柩柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棹棟森棺植楠
業極榮構概樂樓標樞模
椽樹橋機橫檝檢櫻欄權
【欠】欠欲款欺歌欺歌歡

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘【段】段
殺殿毀【母】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【氣】
氣【水】水水永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減淵渡溫測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漢漢
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物性特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛貓猶獄獨獲
獵獸獻【亥】亥率【玉】玉
王玩珍珠班現球理翠環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町畛畏
烟畜畝略番畫異雷當疊
【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾
病症痘痛痢療癬【疒】登
發【白】白百的皆皇【皮】
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
監盤【目】目盲直相省眉

看眞眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窈窕窗窮【立】立章童
端競【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺絲組
結絕絡給統絲絹經綠維
綱網綴綻綿緊緒線締緣

編綬緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繡練繼續
【缶】缺【罽】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】肅肇
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胸能脅脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝臄臆膺臙【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【目】與興舉舊【舌】舌舍
【舟】舞【舟】舟航般舵舶
船艦【良】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦莢茂

茶草荒荷莊菊菌菓菜華
萬落葉著菲蒙蒸蓄蔓薄
藏藝藤藥【虜】虜虎虜處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠶【血】血衆【行】行術
街衝衡衛【衣】衣表袞袋
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
請論諭諸諾謀謁諮講謝
謠謹謬證讖譖警譯護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

動詞活用對照表

*「蹴ル」ハ國語ニテハ四段ニモ活用ス

口語		文語	
種類	活用	種類	活用
四段活用 (カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行)	有死書	四段活用 (カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行)	有死書
上一段活用 (マ・ヤ・ラ・ワ行)	起	上一段活用 (マ・ヤ・ラ・ワ行)	起
下一段活用 (ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ行)	得	下一段活用 (ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ行)	得
カ行變格	來	カ行變格	來
サ行變格	爲	サ行變格	爲
未然	カ	未然	カ
連用	キ	連用	キ
終止	ク	終止	ク
連體	ケ	連體	ケ
假定	ケ	假定	ケ
命令	ケ	命令	ケ
ナ行變格	來	ナ行變格	來
カ行變格	爲	カ行變格	爲
下一段活用	得	下一段活用	得
上一段活用	起	上一段活用	起
カ行變格	來	カ行變格	來
サ行變格	爲	サ行變格	爲
未然	カ	未然	カ
連用	キ	連用	キ
終止	ク	終止	ク
連體	ケ	連體	ケ
假定	ケ	假定	ケ
命令	ケ	命令	ケ

形容詞活用對照表

口語		文語	
種類	活用	種類	活用
ク活用	高	ク活用	高
シク活用	美	シク活用	美
未然	○	未然	○
連用	ク	連用	ク
終止	イ	終止	イ
連體	イ	連體	イ
假定	ケレ	假定	ケレ
命令	○	命令	○

助動詞活用對照表

口語		文語	
種類	活用	種類	活用
受身	ラレ	受身	ラル
可能	ラレ	可能	ラル
使役	サセ	使役	サス
尊敬	ラレ	尊敬	ラル
指定	ダ	指定	ナ
種類	語	種類	語
未然	ラレ	未然	ラル
連用	レ	連用	ル
終止	レ	終止	ル
連體	レ	連體	ル
假定	レ	假定	ル
命令	レ	命令	ル

新制女子國語讀本
 卷一—卷九
 各金六十錢
 各金五十九錢

新制女子國語讀本

昭和十二年七月十九日 印刷
 昭和十二年七月廿五日 發行
 昭和十三年一月五日 修正再版印刷
 昭和十三年一月十日 修正再版發行

新制女子國語讀本

定價 卷一—卷九 各金六十錢
 卷十 各金五十九錢

編者 安藤 正次
 編者 東 條 操

發行者 株式會社 三省堂
 代表者 龜井寅雄

發行者 株式會社 三省堂蒲田工場
 代表者 龜井豐治

印刷者 株式會社 三省堂大阪支店



製 複 許 不

發行所

（東京市神田區神保町一丁目一五番地） 株式會社 三省堂
 （大阪市西區阿波座下通二丁目六番地） 株式會社 三省堂大阪支店
 （振替大阪八一三〇〇番）

三省堂
 三省堂
 三省堂

